

文化乙丑春上東

赤水長先生
長崎紀行

畫圖標註

全壹冊

標註
圖畫

長崎紀行

水戶赤水先生記

完

文化乙丑春上來

赤水長先生 長崎紀行

畫圖標註

全臺冊

題長崎行役日記首

紀行之史家之一體也。以居其實不

居善為要。否。少觀者何能焉。蓋

其人眼界寬閒。冲襟浩穰。得一勝

狀。詳之。則一境界。賦一詩。得之。則

一風月。其篇章傳之。且矣。奚必假



精毫以強緣飾之乎。但恨近多竅
弄筆舌。記怪志異。多演疎詰稗
說。眩曜於覽者耳目。使人忽忘矜
憮伏焉。豈敢謂之文辭不朽之手。
今閱此冊之所載。則徃年幸陸
之海舶。漂流西洋。乃及清國之疆
也。府丞之所蘭。雖彼地其處治之復
寧易也乎。急諭之朝。譯將監查既
了。遂照條例。支給錢米。奉贍口餉。
至日之後。候因便津。裝護送瓊
浦矣。於是乃自水府遣官使迎之。陞
引而還。長玄珠者。在友使中。留滯確

日淺。自相清宮風習。威儀衣幘。主他
孟卓子卓杖等瑣事。見聞所達必丁
寧。園字澤通。不敢滙漏焉。且筑之太寧
府。勢之巖崿。近湖等地勢。陸立水浮
惟率迫。一脉。考方位。遇會心處。賦詩
謠古歌。或自下注脚。正當踪跡之。為再

遊之鑒焉。宜矣。長生素負登譽之名。
深究天衍地輿之度。竟作園也。縣象著
明。其功實出千古。予惟老矣。今日序
此集。諭士衆。以俾人學術。業已有
醒於天心之眼。至爾。

文化二年乙丑夏四月穀旦

播州奥田元総題於浪

義松古書堂



長崎行役日記

去明和二年乙酉十一月碌原村の廻船、甚氣小
吹流す。玄園は源義一、是紫木と曰。彼がお
使船にて、長崎まで送り来る。あれに因る、
本篇乃更もまじ卦く。予ハ碌原れ里山小
代也。碌原又市をもなし、汽子船今我慢と、
都令れ不知ありて、九月廿八日、家を出て水府よ
り立、貯吏小林半吉清生同武吉清す。人少、と
いふ、後の九月卯日、水府を立、二日のハツ日、京
終碟川乃處邸より下りて、吉日町、大

黒庵長ちよつに病す、西白八通第

五日富士刻

オメツカタ

監曹カタより、多御理吉を取扱候

きる人邸中乃中ひよそ行跡を描く、門出を候
輪カタ二つ鎧カタ二つ抜筆二つ、手袋二枚、小荷駄二匹、上
下カタ一人あり、手袋無戸塗カタ有り、公事廳監
里カタ一戴カタあ入りに多用カタあられ、
通カタもとれ事、細カタハ記——難カタあらべ
六日、夜深のおりちと酒カタ連カタもとて、時事の
あわちたう、住むき常に諸国とおけせゆ
とうふ、小栗判官乃事、いそくの説あれと云、

附會カタもとみ、其實はカタし。馬入川、せばし
み上六甲智れ猿鳴カタと流カタ来る、白旗村カタ明
神カタ、金子カタ宮カタしよ、源カタ延カタ尉カタ乃首カタひよし
不、無度カタの首謀カタも、洞カタの者カタあり

白旗明神

飛禽已盡奈良寺、不減淮陰元帥功、昔日
更無麟閣賞、孤村空祭白旗宮

大様の驛カタ、ね木立、宴カタとくらカタ大様の駐
乃カタ、此カタハ虎カタあれ回读カタ。吟カタ立次
まんたきカタ毛カタ毛カタ立カタ、毛カタ毛カタ人カタ毛カタと
時カタの次の秋カタのえられ

三
卷

アラカニヤのアラカニヤ
アラカニヤアラカニヤアラカニヤ

卷之三

摘葉丹後守殿清善提所

富貴の身に於ては、
又家風を覺えり。不人情には、
豈黙川の上大知の定跡ぢ。

とし。江勾川より渡、冬にて雪をもたらすが
あはれ。鞠子川とさへ、げの、小田原より、げのを
昔に源氏が居城し、西へ出で、道の左、石垣山を
豊太閤乃依代の時、御跡よせりふる。

十七日
中興の日
湯本村、入口の右は早雲寺、山陰又

代の石碑たり、擇候を小く、大正の墓碑似も首

さすがに染里町から、又連続修業の如

途中、うなぎを食す。諱せん。

ウ一往在當時我空あり、もとより能人草書の筆の

本居宣長著　日本書紀傳

吉成家根の金創流、東洋ちひく、宮内省

お手に了友切丸、赤木柄の小刀、十郎左衛門へ

太刀、皆鋪之。乃以一束黑絲繩綴於一頭，又以繩繫於

卷之三

古文子言

芦北源氏の如き、清風の如き、國の尊貴より、勅書
あり、女人と武具と、證文などといふ事は、御心、御意
サハ儀よへて御通す

函山領

先仁帝の爲伊与國と號す
之比ニ移ミ社於五百石

何函谷關

東方百二固、石壁萬重山。縱有鷄鳴客奈
何。函谷關。
峰の頂とて層巒々々、所より、至るの境也。一里
もとよけに至る所の方より北に之、一極至り。此
處の石を石城^{スミ}也。二極北^{スミ}、大山^{スミ}の山を參
考、故中窮多々く、池より後年^一、げふより廢^ニ

○子貴極、豆駿北境なり。黄瀬川、ひくに越女龜
越、かへとくら、龜城の觀音寺をもて、そちうぢ
すと安達さるあや、おめりと一里ばかりに長久
保とて、古塚乃はばり大、宋の山あわて、そとを細
居候也。前よりよしむらの事とす。ハモ、
日人治本ふる。

八日、又西行。西子北海古里、江尾まで船を下り
宿す。左はナホ本村余とて、昔六代溝あると新ら
んとナホあり、右は浮城の原、ナホハ東西三四
里あらず。今ハサヒ小治なり、梶原の生嘗也。
一キ ツキ

ふ尋へきひかく、かし隨て今泉村、左手を唐の載
し立所にあつたるは今に留有すと、其湯殿の
御事なまくして、室之内を活し、日本一の早川也、
岩瀬とて寫ち改たよらず不なしを、かく、海原は
岩瀬とて寫ち改たよらず不なしを、かく、海原は
二ヶ所あり、かれ川と早川とを、左から乃川居るゆ
上北洋へ下船とて、汽船鷦鷯女の巻とて、船
○浦原○油舟○蒲原より鳥海、津々野、浦
乃ノ江とて、皆因手浦とよ、佐東なると、蓬萊山地
花あり、え葉はつて、咲く、時未だ年餘室
事體乃時より今れ道と云ひ、昔不令故
ト御す。左の御事なまくして、左の御事なまくして

うらへし所なり、修了就うて、ひそむすとて、○興
津巨鼈山清見寺、木立院、左に二百石、右に八十
石と雪舟の筆なるとども、又清見の穿竹左院
あれすとあわとせとと通じて、ひそむすとて、
得矣、堂前はナガラ乃圓梅也、五重塔いま
す、壁碑の御事なまくして

題清見寺

躊躇着、清見寺、山海春秋天、後宿芙蓉、雪前

淳田子舎

江尾子馬

一回岩茶村の石子、杭州より

九日、岩原より右方に大内院をあり、もと

又庵東山とて是景時父子自當も一所に居有
トム、以て人をもて大味トナリハ所存よ草鞋の
神なり。日本武の事途より、南伊の城乃和モ寫
チテ、間の社あり。と云ひ中和文書モ御
新宮と云ふ。苗志メ一社矣。御供ニ子六百石本山ノ候
姫命と云ふ。裡門まで樓門とて御殿焉處也。
山主也モ平地也と云ひ、新宮は裏海也名ア一ノア
久能寺と達極寺と云ひ少ぬと、林木少々然文
因と云ふ。上野ノ山とて御城也。而して高

○實生の流川の家 沢宿町行う○妻嫁門へま
渡あり、かくと嫁とも又どうせあれども、あれ
より北は足久保と安堵茶をす不すり
達穂守らは百石○の越村も一立番を
了起女の年一五〇丸子門牌もよむ五の町
の内へ保志寺とて速すに家主の窓邊あり○
宇取の「名物うちとて十番子我主も○」
よき者也而ハ茶庵の如前れの山なり

過宇都山

秋風千里外、處々擣衣聲、薄暮葛蘿路、旅

人侵霧行

御ひゆの故れもへ大手門に
此のことを思ひ及べ

大塙川源遠の傍にあり、わざわざ深く越便五丁
落成す也。おの日金谷工がさる。

新編中華書局影印
音書日記二集
中華書局影印

日暮を參りて牧の原と云ふ所を出立す
跡とすと原乃瀬山なり。當日後半ナ
ル所、宿候とすれ、承之の御は黄門寺と親乃寺
とす。其御より小菊花あつて御手書
山のぼり故ナム所、すばらしき事あり。御
御手の御墨御墨御墨御墨御墨御墨御墨
一画行。御手書

過小夜中山

四
卷之三

昔日遊京洛。吾廬在海東。豈料將白髮。復
越此山中。

越此山中

蓮乃まへ中にむかひ石とくあり、むかひのむかひて
なし、女の鐘を鳴らすとあくび人のまゝと
○右北方清妙乃親吉家いふ。ハサウチの鐘を
主へ今へはなれりと云。○微徳を曰ひ乃入に
ゆきあらう。○巻内八幡 神祇石石。○姫の田坂の西
とくとむら邊よりとくとくみ、城内の坂高石布名物
所に下坂とくとく源治ある。○秋葉山へ行道うち、西

少々あやしく十里経り、細田村左の山に移る。
天神乃峰を登り、少々小笠原より一部を下りし
所ゆゑに小笠原山と云。あくまで茶園花莊と
名づけ。明里を下りて日連上人乃丈もさへたま
るのちに、岩寺村を抜ぬき、新井又都を放せしと
上乃原一言改首言戰場なり。又付ハ富士を是
行はれよ。此處あわとのとも富士を是行はれよ
れし。在より獨立百石。池田乃宿船場よりもう
町右よりも有あるし。少々平家盛らむ
湯谷の齋諱を。二ノ谷川傍の漁港の瀬より
、水田乃石の方水津神あれ。或あり。社は三百石
神。主は多聞五郎とて。龍藏乃子孫也。今より
は、淡雲坂下より宿す。けま前ハリ久留と云。城の力ふ又
が明神、諏訪守神あり。いはまも社領、二百石つ、
少々。○、彦坂。キ花井一門の船宿。ひいて陸地
ありし。御座はまだ大地が暮れて海となつて今か
と云ふ。清瀬所八吉の城主もと勅あるあり。たゞ
御主の令主。少々は御主の御主。御主の御主
と云ふ。原山下に奇乃名勝なり。高浜

加賀美物ハ医療手行草と
仰うる鳥山某道人の医男
をうそとがえりとお吉田工
居手を賣物和合の行教を

ともニ遠乃はくじとく○白浪がえ○右田井
あり、すよよハカ友左介とて風船の方ことある
じよゆて、店は獨つて一施とたゞる

題加藤山人藥肆

風来山、首理仙人來
西三

青松落々帶清風地接鳳来仙路通幾歲
主人能賣藥也知市上有壺公、

○洋油○十一月赤なよ宿入室さへ沙門寂照、
俗名太江定基、みどりうれ色女の事と云
せざーとづれ八音とよ庭女と不ぞと○長次

古歌

古歌

古歌

古歌

古歌

古歌

古歌

古歌

古歌

又後船一隻あらゆるを又大
風止むに候行より船を破れ
南京人溺死せ。左岸にて
船の先づり水深のなき者を
救ひ多余人殺まつて之を
自殺とす。南京人トもは
主に舟車にて歸る所あり。

馬卒とすら取て手のひらに人をすくひて石をかむと
らへて居るが漂流人の事と似ては人ねん
うのみ摸摸してはまつたがよしむとゆうの
故と語らへどもまづりて我世人とも安南事
酒食ちうといふと如きあらわし方○石部○梅木村
村中散歩する旅店の外あり、此はうちと假山
金池また道中を第一に見事あり、やひなむる
様長ありて子孫也其家也すれや○よほほ
村傳説乃様談可矣○草津玉やく

ナシ日、熱田乃へけり。豈よ止水の社を、拝らまれ
氣京まし、なんぞハ累のとならん、たゞ石山へ
行遁き、今モ空長う塙左れ田のゆより。○膳所
塔下けふと哥子ハふとて、宿とすと、松本大津

かで町邊を走り在り義仲等とて本當より
最前乃のまゝ暮すり、毎人牠者より暮すりも多事
大坂にて病死せし故つ人をもぞと曰ふ
レカナ
屬へ莫れぬとての事なりわざとすぐれておる乃

古歎
約束で手を貸さる
では約束しておが乃
手を貸すのよ

乃都さうり町教れナハ丁人安田御飯のれ
 はうりこすちへとお宿す、長等山國城をとく
 銀音堂以禮のれふあり、地多く千里の國故
 痴も全し、伊豆坊食附林乃同よ寛ぐたれ、
 古鐘ハ龍穴よりようとくと、人信設立、次底
 亦鬼氏ナリや、折猿ホラノリよひと、何モサマ史
 事モキテ傳とほ、モトヤ前象口也
 ふれ方へスハ町りて新羅御神、酒と、
 よう大津カツから、寧波津町の左の上にあり、鷹丸
 そは大佛殿本尊は酒、さすようる
 平安城

名山四繞瑞雲淳、粗武遷都據上游、本自
 東方無間鼎、千秋不改帝王州、
 馬ニシテノヨ京、西也、はまよめ在北野、
 道、僅一里もかうのまゝと、大山唯獨ハ沙翁、
 西又山より以て有み觀徳す。其のね、正當原

乃里○御見はばく、京橋れどうち秋のとて
門もと内里たすのとてよ大坂ふるもれ、ハ橋

しゆきもこれまの中だよ

古寺
宿處あらゆるに詫

ナセ日乃朝、天の橋の下、ハ朝倉す義く、古寺
シテモキモムニ

ひたは北野を是より、渡邊村へ、宿す今度
のおり、升庵をまわるあとあけて食事あと

する所へ長堀宿田町酒屋や天祐屋代吉と
なつゝ有りて豊前小倉との軒元を活
き、水のまわり旅中と深きに、さくは穂くそ
不自由なれど長町をまわるや理窟あくまぢか

よと水禽れ歸るを鹿入、船子れとひみん、まき
るる舟船子えと、天草よりくはくと連尚子○

佐吉根津○天王寺伽藍の生むる水のるはえ

○水の○天の○西門の○庄磨の○河原池此木
川根と○山海三文下れ名跡石墨ノキと之

様の御事文アリ、海外多々有り、正遂のと、追
き見よ物のとて、見よ、ゆきうね、猿面と代え家

參り候る事

過大坂城有感

江上巍、大坂城依稀奉主樹功名感陽

東風、北北東風。風速、北と西向へ。此處を今
見し、行人道の和久島より十四丈門上に、上
橋の五百羅漢ありとて詣る。

廿四日正午後、北風は寒く、日も暮る。

廿五日快晴。北風もかせ止次、北風も強め。

尼崎より西宮へ、奈良詣え、けふを蛭見三郎の湖
天代船宿、毎日奈良へ通じる。船宿にて、新
久の島より捷徑をあけ、四十町半、尼崎より、
淀へて、うち、岸ノ子六戸崎より川舟と船
みへて、その島より着く。

廿六日明治、傳法小漕や、近頃は帆を揚、また
海面よのうと、潮ぐれが多き方だされ、小舟と
大きき漁船の漁、それでの煙れなどしく東南
より大水河母代諸事、家並佐野岸和田紀、
加田家院のよほよしと、南より管轄あら、近い
磯松尾濱西南に接する、波浪くわらうと、
前後左右遠近の大水力、ぬれ十艘の船、

さうと、年をかえて漕つたが、船は水景舟と
いふ。

そひし、源氏のあよしに風流よやたるゆ
 一谷の行ふ私とくもそのまへ、人をもとす
 かみに移り疋より上り、源氏北里銀山たがうちを
 游氏や行幸北山道を経て、主の御のと拂らず、不
 とて古松の間へとまきづりす御寺へと、門を
 頭より上野山福祥寺とし、御坂ハも「軍の」とい
 馬鹽たよりとて『なると』門前ふ若木の櫻、鹿は
 義經の塚、孤苦たる、邊ハ丹波の田安養寺うり
 草乃木さきとて松よ直す鐘ととを、守候す
 もより實物とす、敷蓋の角、甲、冑、笠、鞍、鎧、
 うじよとととととととととととととととととととと
 ふまきはちの色左右より合せ、十人十人下
 と向ふ不す、隣居をきりうむわきとて、か
 られとほすとよしとよ、かのとよなみの実
 が、らす、壽永の空手店へ行よらうじとひのうじ
 菊の縞、さくに平地からとて、あめ一丁半、高と
 たり、ゆきをのじして、おね六七千石、此の方
 まの谷北の山鍛冶のあたりにはまかし、源氏
 將乃鶴越へとまつて、源氏のまかし、源氏
 岩の下河内街道のけうに敷盛の宿場を、沙

上吹ひからむを五輪乃半とて御是よりゆりて、安よま

一谷覽古

知是源平古戰場、須磨明石望花々、旌旗赤白今何在、唯有青山映夕陽。

敗盤墓

松風玉笛響、旌幟自雲垂。昔日飛花地、後人墮淚碑。

一谷

長中行

壽永行宮摸海濱、東兵一炬忽灰塵。只今唯有長松樹、日暮秋風愁殺人。

御是源平古戰場
月船ノ日暮秋風愁殺人

家詩

毛集

御是源平古戰場
月船ノ日暮秋風愁殺人

吹ひからむを五輪乃半とて御是よりゆりて、安よま
乃川ノ水よ入て、水をどじ大坂下を流上す丈里。
廿七日移屯ハリテ、すり追風と序帆引うけて、日
歩く二三里、ほづるに唯姑城文字獨書はるさと
存し、又アシ次第小室乃婆モらかくたゞイテ、多
少の後よ小室ノ内、东伏願寺ハ母石の浦御事
あらぐ、後はおぬともかられぬ、おはのまのハ女里
御けふ東面よ浦を秋ひとゑと、漁木舟極て
塔も見ゆ、左より小室の人家も若テるが如
候れども、大溝よりより大正山と石川

あにあらをハ栗嶽、ハ鳥山、高さと者へと見
るも五六里もありまし

八嶋覽言

壽永南巡日海山入戰圖。英雄太不^テ近。千

歲暮雲孤

右ハ京上鷺鷗左に繩ぬ。左が鷗。右が在
志経東なる。日暮く偽あり乃日比^ヒ津、堅石
今うミナ一里隔。岸濱とて波たゞし。昔人風景
すこし詠まれハよき醉むる人もあり

女八日

ちの日洋船次、陸へ上れへと來ぬうす小舟を
備前船の磁^{セトニ}器あり、毛糸^{モロコシ}にて合入の洋芋、便
ちナ洋芋と下豆^{シタマメ}も遠路持へる。少々買
入れしもの地まで見ゆる。前戸口^{マダラ}を入る余を、
アリシ候^{アリシ}事多也。洋芋と半度化妝^{カス}す。不
少^{アリ}とへづれぬと、南洋^{ナガシマ}を讀み高生洋
城^{シマ}ノリタ映^{アリ}。林猪^{リブ}小額^{コウイ}。海上四^{シテ}と
ウ申^スて利^{アリ}。おの^ノセ^ス帆^ハ寫^スく。漕^スく
遼^{ハシ}南洋^{ナガシマ}。金毬羅^{キンヅラ}。丸龜^{マルクジ}。松山^{マツヤマ}。

江はせせとまくと、陰陽^{ヨモスカラ}の風とて走りしれは、
塔地^{タカチ}で高めはは能、大ニヤシとて萬中^{マツヂ}よ通て、伊豫の
島より又小舟船を聞じ、十月四日^{シキ}の辰に、
其の日朝又里^{アリ}にて安藤^{イタウ}の邊^{ハタケ}にて、
近女^{アヒメ}と有て、宿す處なす、されどあはる陽道
乃西里^{アヒメ}より四里、往^{ハシム}の今治^{イマジ}を出^{ハシム}て、
城^{シテ}ナシ^{ハシム}。

十一月二日一過^{アラタ}、二日未^タの刻^{ハシム}、瀬戸内^{シマツナミ}を
左^{カズ}よ^{カズ}浦^{カマカワ}を左^{カズ}よ^{カズ}くい、向^{カスガ}を左^{カズ}よ^{カズ}くい、
里^{アシ}キ^{アシ}を左^{カズ}よ^{カズ}くい、無^{アシ}浦^{カマカワ}を右^{カズ}よ^{カズ}くい、
里^{アシ}キ^{アシ}を左^{カズ}よ^{カズ}くい、無^{アシ}浦^{カマカワ}を右^{カズ}よ^{カズ}くい、
左^{カズ}よ^{カズ}浦^{カマカワ}を左^{カズ}よ^{カズ}くい、向^{カスガ}を左^{カズ}よ^{カズ}くい、
五

瀬戸内^{シマツナミ}、今橋^{カミハシ}乃^{ハシム}を左^{カズ}よ^{カズ}くい、
四日未^タの刻^{ハシム}よからずとて、久く、人家^{アヒメ}、や大
あはる西北七里浦^{カマカワ}て、巣^{スズメ}居^{ハシム}すわとて、かす
あはる、鷺^{サギ}もさうり是^{ハシム}まで十里あり、岸^{アシ}を大
あはる。○津和^{ツハ}の小泊^{コトハ}、拂^{ハシム}はる^{ハシム}とて、御^{ハシム}室^{ムロ}
鳴^{ハシム}とて、お^{ハシム}日^{ハシム}とて、お^{ハシム}水^{ハシム}とて、淺^{ハシム}の宇^{ハシム}
小舟^{コトボウ}とて、お^{ハシム}おり^{ハシム}とて、お^{ハシム}くね^{ハシム}とて、お^{ハシム}け^{ハシム}とて、お^{ハシム}れ
曉^{ハシム}、宵^{ハシム}の上^{ハシム}とて、石^{ハシム}せんざん^{ハシム}とて、岩^{ハシム}とて、
乃^{ハシム}上^{ハシム}青空^{アオサカ}曲^{カク}画^{カク}れ^{ハシム}、左^{カズ}岸^{カマカワ}長門侯^{ナガミ}
の本^{ハシム}居^{ハシム}とて、左^{カズ}の海^{シマツナミ}人^{アヒメ}とて、かの^{ハシム}。

兵ひりほく、甚奇絶乃まうち、からくううちを

まで十又里

六日辰巳刻より清公へ出でまへ、次の日午前
防瀬とナニヤととて、おもむちの圓通づく。
立あらざるより御初次、左と豊前右、長門、
右近と僅か又六町、たの海の早、戸代明神
ノア、毎年十二月三十日秋半が人海中よ／＼和
布とめゆゑあわせぬまよ／＼一里やどりて
石を下め閑なき、前より名龍鷗行と、此の小倉
は代士官本伊織、長の侯考士佐と本昌之也。唯
官本武藏の人事者
詔とまゝよ伊織ハ武藏
子三小倉侯上使

玄蕃と角川、伊佐、慶喜難事無、度内事有
り、音平をあらゆると、行宮とす、まこと日久
あり、終に逃れ乃石之上ふと改名すを石碑
有、むし、豊太密射御陣の主たけ不吉後、
浮舟、海にまわる、あたぐらむ私設と改名
向害とれど、あれ事々小倉はばく〇十月七日
石城ハ海岸を、城樓を大河て、敵守とし
下、橋のを取て所塔能又築て、廢はす。事無
人をもとと、ちをひきを、す、榜地を、

それ下品より、以石錠にて亭主又多房方より
拵乃端切とあるとせあると、皆上品と、地而密を
唐はんとあらとし、まことに優妙後、錠子の通
きより、誇れども、此の因位へと極の不思
事也。蟹也。柱も、或人を、弔又役と化す。

ほ花うわよ
手を

題平家蟹

夢中アラシ在帝所、二十四年榮、豈意介虫小猶

遺、平氏名

八日未嘗少り、体の除とあらぢやま半行
けじ豊と疏の時と、思はば、上と原、茶屋の裏、極と

すが、不屈の處とて、盈余と、もの生乃備貴
櫻うち、漆す、似く、御奈と、室と、櫻は、室ふ、不く
むく足と、九月北櫻閣、八月、黄櫻の室も、りよ
石炭と、かずと、拵鑿と、と、鐵を、鉛く、す
用ふ、一擔と、四拾文と、直方川あり、芳巌村後へ
四里、東通用軍了、船の、と、小奥多く有、さうと
了、奥を、籠ふ、仰て、やうす、八常津少て、いなむ
との、ぬ、莫なり

能方村は、美豐、西林、社、紙百石大、社あり、而て
双林院と、福昌院、内、善と、境、而て、之の、と、六里、而

宿也云乃齋滿もと又、飯塚ノ宿。

一日雨す、冷水岸と錦ゆ、風ふかし人食す
若きし山家、殊も之饅し、是れ人おはせ室前

満浦山

古事記

御トムク社ト有松寺、毫も
豪も事と烟うる。

葛家

御古事記、毫も事と
テテモアシキヒトモ
アミハセモ

御トムク社ト有松寺、毫も事と
煙うる。

三松寺

明薩天錫、天滿宮詩、無常
說法現神通、千里飛梅一夜、
松萬事夢醒、雲吐月、觀音寺
裡一聲鐘

明洪序詩、日本曾聞北野
君、愛梅潇洒又能文、謫居西
府三千里、一夜飛香渡海雲、

延喜三年二月二十五日右大臣
皇子配所、葬于安樂寺

宿也云乃齋滿もと又、飯塚ノ宿。
一日雨す、冷水岸と錦ゆ、風ふかし人食す
若きし山家、殊も之饅し、是れ人おはせ室前
満浦山古事記、御トムク社ト有松寺、毫も事と
煙うる。

御古事記、毫も事と
テテモアシキヒトモ
アミハセモ

御業堂、錦樓多あり、後日數處のあ私行り、不
才乃前左口形梅右子不使れ松之れ柵よ笠岡
より、活潑もよよよと、生了取はば延喜より、
此梅とつて、お人はひらとひらと、あひて、おひた
まね家來、カヌナ、おひたとひたと、池

池を捕獲せ、天日暮にあむと、おひたとひたと、大木
あり、おひたとひたと、おひたとひたと、池中は度
詠ふれり、おひたとひたと、おひたとひたと、

鶴、鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、

鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、鷗、鷺、

年高の仲文達立、今代某師をハ前の講堂を
モ代に高居王後と号し神宮奉事御子と云ふ。
多禮をニハ月と申せドトアリヤハリムクシ
梅の字ハナタメの様に經文を申す。又薦詮
新たまゆれおよ人を尊信更に乞うて乞を
至る。あまく恩義ある人を重んずれ今無用で
往てはまのまわ今まじめにて御内侍
御と慰めまつる。万額八金又兩、五十枚乞ニ高十六
丈五尺、御内侍御と申す。是等大
きく御神前にもまづ御内侍御と申す。是等大
きく御神前にもまづ御内侍御と申す。是等大
きく御神前にもまづ御内侍御と申す。

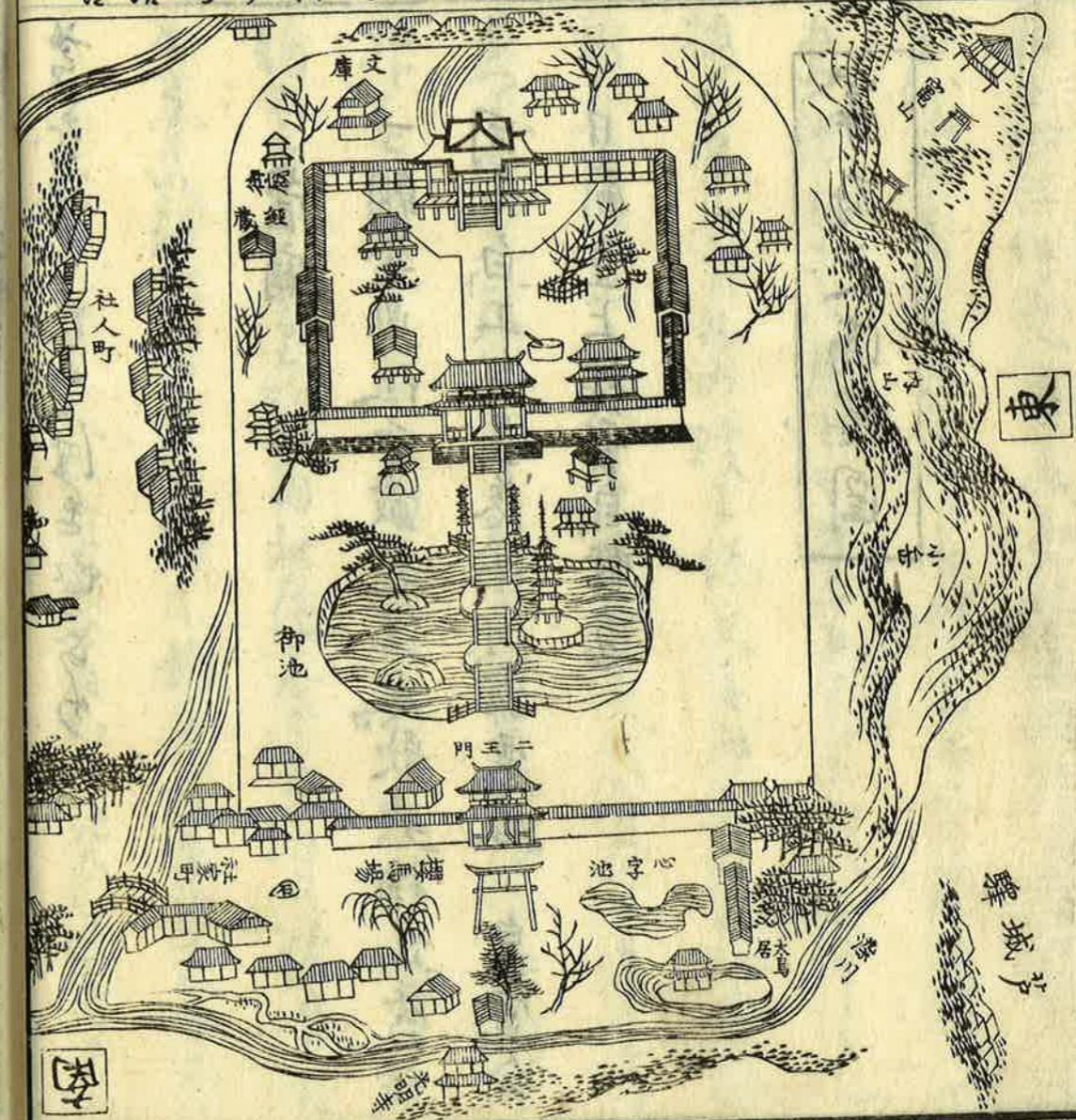
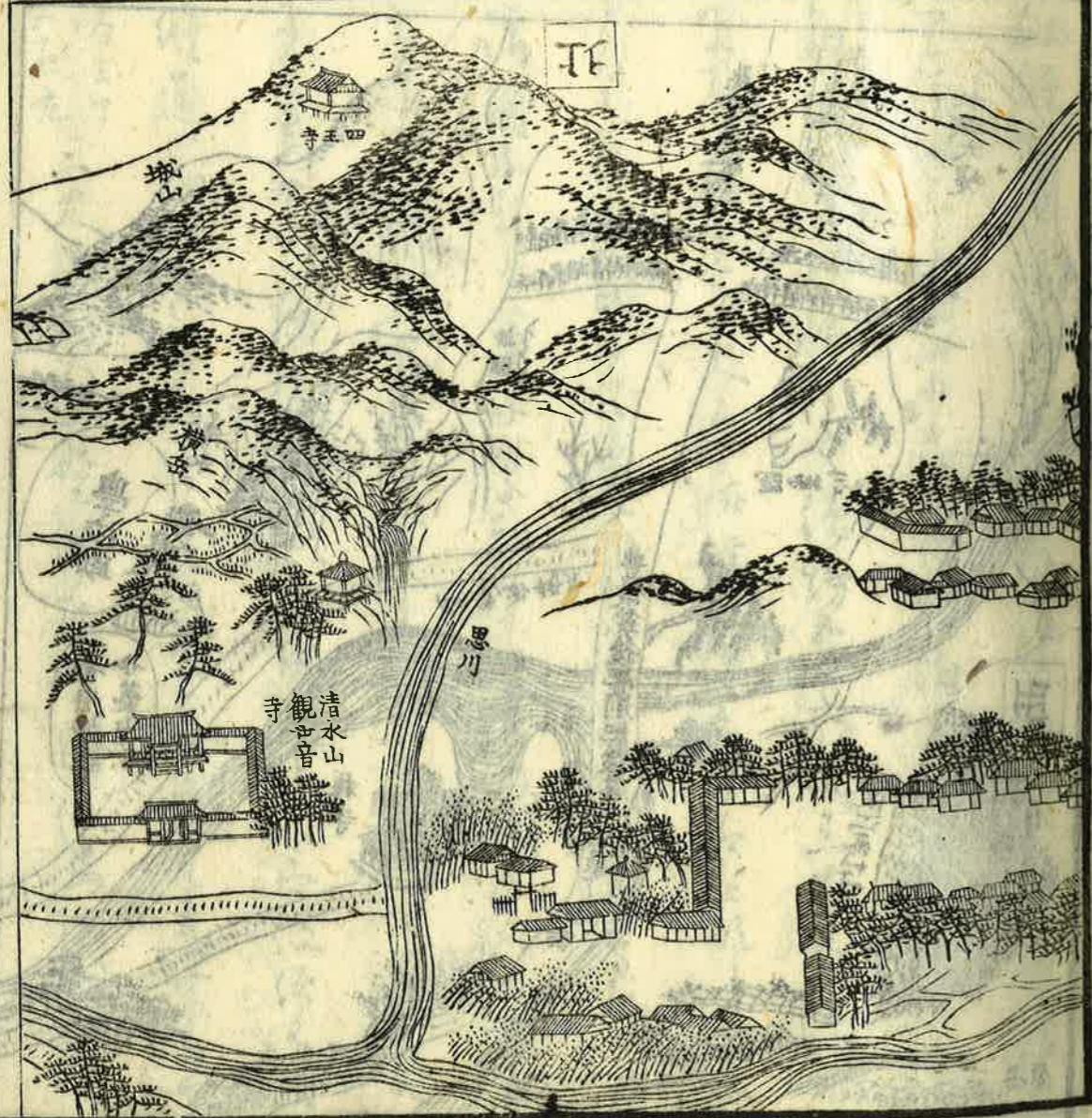
菅廟

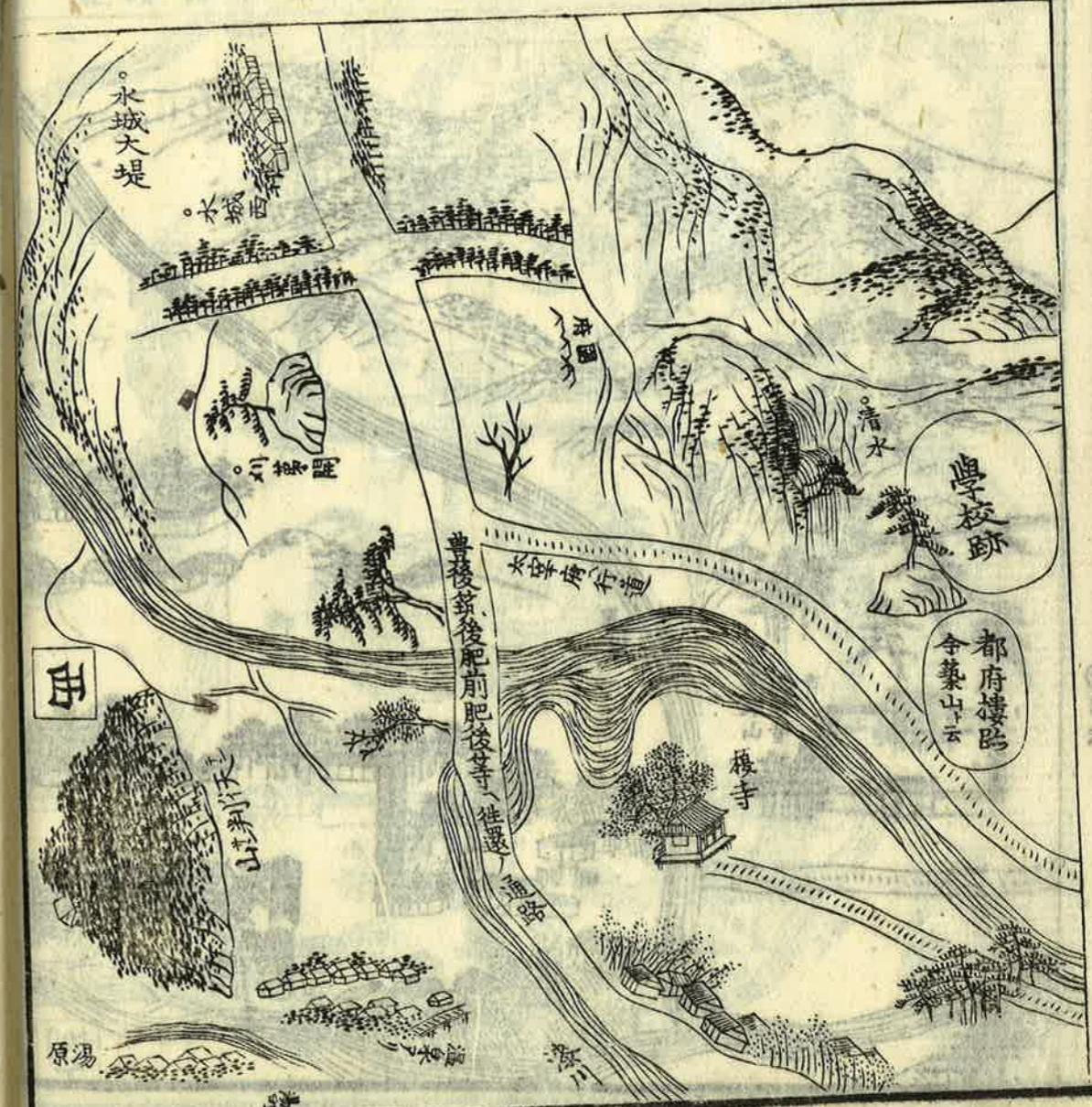
一朝登鼎位、千載起儒風。歌興柿山秀、詩
同元白、工台星落寧府、辟靈感。皇宮今

日廟堂上、瑞雲自鬱葱。

寧府二滿官圖

白文の日向島を望む
秋風とさざかの吹きゆる姿
街と人よりさり一詠同
志原仲辛さんと経営し法
門脇社地とほじと庵ふ乃
山櫻心寺元氣の門はともに
天音えと庵うどまくらせ
ら。後塙門庭の落葉黄云九
寺の綠生宮系若昇とよみ人
物もうけで西附より社
殿と門を主とほほば
後移築へ信貞より始
子承継昇とよみ人を主と
小山ある北表記して子承継
寺を今に之をかねて松城し





方飲食行所朱印子石龜後の水田小豆稻谷段より
下給地ニシテ石室向テ奇浦と合ひ四千石を東
敷法親王に屬シく、傍傍六十石淀、三十丈目ハ称
五石、庄主ト大名居信歎シテ、子石と仰一石未
トリ安原氏モト妻弟ナリ。者の大名居歎シテ
清僧よナリ。弟子玄部より奉り嗣今此住歎シ
テ近キつ乃二萬石也。次モ小鳥居主モ安原氏
モトアサヒ、捨松、匂山、并成淀とて、之役修めて
修造一切も勢成シ。皆安原氏モト妻弟也。
各三十石定、二十六支月八小豆伊勢也。回但馬守、同カ加賀

ち、乞も平姓吉宗余氏、かく禮の事成し、矣。表示
した生王を安住院、と號す。乃ちのれをもす。
宿みの處は旅店とて、清旅竹屋、又禮門町居裏
らむも原、せり。緑色の壁、木と瓦板と爲り。
人の溝じよ、た窓を北山主不内山村の内と至る
今北山村の北に墓地也。

菅家詩
都府樓變者瓦色觀音寺
裡只聞鐘声

一云變字作唯瓦字作舟
也

一日天判山、山中有天拜岩、
菅公祈天慶、延喜二年事

は在都府樓乃述、大门乃碑位六尺觀音寺の
あり、缺もとも成禮院、固有寺、皆寧府のまゝ内
西より來、此院御子母ゆ、寧府、付於西名奉也
とて、寧府御子馬跡、二月市、且春田と申て因
代は御とて夜半し

九日、神源寺とて、脇坂え。○佐賀え坂下とて、鍋湯
候三十里方石山とて、乾道寺碑とて、所うちナ丁
いより南より北へと改えす、げき下り四方
東南より柳川めぐ、よより西岸乃諸山、あわに

言ふ

門と石井ふくさか
支那のいもみを

門上山、少々河床底泥あり。船はおほきれり。
其日はあさく雪下りて風をし、牛車了

居どれ。

十日あめを一泊停の山野よし。泥子あり。山海を
登ひま、温泉を。山野よし。松楠、茶梅など。
人多く皆心を以り、寛むゆる。けふまと
小橋とす、姫壁より高き温泉あり。

十一日この宿代換八十國金の物を。是年一月
五日、圓卓りて食膳す。乞うり時は、あ行七
里、舟底底六尺既も。此よりハ海に

一作被替

うち大村まで十里余れ入海、迎門八僅み一二丁半
あく薄衣乃早寄。河津のゆづらに日本之赤
乃迎門とよせ、おもひ猿奥をどうぞゆて而思し。
是も一望す。ゆきを海綿のうへ、お渡れあわ
足を踏まし、手はも黒毛ももかと氣有く。鈍法
也。首筋人指を入れて却て亂よ。端敷
よりとて向内を勝ちとす。よとてかにせひり、
ゆき一尺半す。行有りて、申比刻下時原
先を湯屋よ。宿

十二日船を解、餐自部ふと用意して静立つ。

是より長時

長時乃ひあくとあゆ

一里間とひれは長時を迎ひ人麻社カミシモにて送
さむ六人来る、まよひれを仰そてかとさうと云、ば
と詠傳ハガクは承年ヤギハ年也とおら網ハシマと不絕ハシマタ個
を詠傳ハガクは承年ヤギハ年也とおら網ハシマと不絕ハシマタ個
をとすと長時へ唐人多食糞ハシマタと喜びよおゆ
御飯カミとす、一時長時は翁カミく、並て富貴定め
小林氏、室田氏、赤坂家、権町伊勢守理定の不
あり、毛羽氏、坂野氏、乃旅宿も田中菊左衛
とそほく町の乙名エナと、又を離て經由カミかを次々
下りるを有アリと、凡て堅正カミラシ鐵タケ鉢ハシマタ、
八角湯結カミラシ仕人カミラシと、皆船上カミラシ舟カミラシ奉カミラシ行カミラシの役人
名利カミラシと通カミラシし、詠と詠り、今お酒カク也清音カク字文
力カミラシ乃人カミラシ、詩文緒カミラシ名の詠カミラシ今と詠カミラシ也
やとひれをも、またれへりと犯淫カミラシ人の門屋
葉内省カミラシて拂カミラシめ此廳カミラシ也、淫流カミラシ人の以味

早朝よりおひさまがさへて旅舎を出る。夜
市にて物語ふと旅館のやうと算代を取る
文書をあらわすと、さも運びてかと申ゆる
事はす。清音と組合ひて車と打つて申すが、
相手詩文を済む程無事、次第に申す
まること。此をよしと申すに申す。

十四日未明而下り船を乃づめ。夢の如き

夷國人の娘を一見す。先に日本地の船
を出でぬとく内海へ来禁せし。四方石垣を散
在する爲め、少々門の側小島不ぞ入。今

船上すれ前半乃づき。旅控あり、金を小積み、

樓の窓より見度。院人ともう。形をしと同
じて眉毛を赤まじい人相とれけぬ。怪しき、

まことのけ地の色女ありとす。同行の人皆厨子
より入て階を登。床附紅毛人と出逢て驚矣。

主部色をあくし、衣装をそぞろと正姿の假
装。假の假、衣被を此方比般引のよきと申すと
く。金をとるをよし。舟を油なくあし細と合

せ船下分掌くよのあを。輕業装束又似と、
これ羅紗代類す。

筆者リユウトルフロイトン・因像



筆とタントストウコトニ
鳥の羽ノ聲スミツキ
墨牛紅毛怪未詳知
舊諸書清補記之。
華青ハモテウト云

○井澤園より是人へ
の本の中どうりぬきゆく
娘子の首をひき肉を食
たる事の多き事すらある
事にてはくとへ相物と
うる事の様なことには争は
事有り

ましに御年と力量の時年をもとて確乎簡
筒で内へあそひを極手はきて筆によく
手板の文字あらずも書寫の字はまうかよどむ
難し、若葉人は多く写眞のみをもて乃西を額
のうへて教わなく拭き去り、畫面が破損と復
ましも遠巣スキトトりす見ゆ、圓卓の法嚴カナリ
美麗なると書きし人物とつほくあま、
首筋密サイミツやと倉卒よふとわきうるやし、便
大鏡を所へにけりかく、とあるがてはあらそ
庄中比人等あはり堂上をありて冷暖をり

店舗があつて、樓上^{ニカイ}とある字があらかじめを敷

中央より幾量^{ワタリ}かずアラケフラスコの酒^{スバ}のみれども

らぬれど、皆アラケをうどん、猪^{フラン}の燻^{スバ}も中^シよ

タ竈^{ソナツ}龍吟^{カラカイ}蚧^{カニ}と並^{アリ}水^{ミズ}と高^{タカ}ぬ鱈^{タケ}うづくら

ノムの側^{キヨツ}文椅^{ロボン}ぬくにり、おひと筆者^{シテ}吉

子^{コノ}年にあらしよ店^{アシタニ}とさみと年^ハ有^リユウトル

フロイト^{トマシ}といふもの多くと客^{シタ}よ室^ルへ長^{イツ}持^ツ

と通事^{トモシ}人數多^シ淺^{ヒカク}ゆく中^シも西^{アヘン}を取^ル即^ハ

英^{イギリス}酒^{アルコ}を飲^ムて、語^{ハシメ}ハ彼^{アリ}年^ハ老^シを時代^{ハシメ}を経^ムて、

シテ^{シテ}後^{ハシメ}文椅^{ロボン}不^シ店^{アシタニ}と云^フとよすあま

おも、筆者^{シテ}御^{アリ}とおどり、書^シよとせ、筆者^{シテ}書き

文^{アリ}れ故^ハち書^シを西^{アヘン}とし、左^ハ方^{カタ}より右^ハ始^ム

て右^ハ方^{カタ}横^{ハシメ}りよし、通事^{トモシ}人の譯^{ヤク}文^{エニ}あられ、

何^ハあつていよ^シともあらず、紙^ハけ方に^シもとすゆゆる、

手^ハ石^シ筆^シ乃^ハとくも^シの胸^{ハシメ}乃^ハ手^ハ付^ムと、

不^シ刻^{ハシメ}固^シ有^リて、墨^{ハシメ}と墨^{ハシメ}と、紅毛^{ハシメ}種^{ハシメ}味^{ハシメ}

桃^{モモ}糸子^{モモ}と赤^{モモ}茶^{モモ}とすじ、ス葡萄^{ブドウ}酒^{モモ}。

ア子^{モモ}泡^{モモ}味^{モモ}甘^{モモ}辛^{モモ}砂金^{モモ}入^フソ^{モモ}ソ^{モモ}酒^{モモ}。

室^{モモ}、生^{モモ}葉^{モモ}青^{モモ}、肉^{モモ}蔻^{モモ}豆^{モモ}、フ^{モモ}ラスコ^{モモ}の注^{モモ}子^{モモ}硝^{モモ}子^{モモ}の残^{モモ}。



此下アモ、ス元國乃上野の様ふる。仲良の中
夫ニ、娘アモ、子を是處にあれ様ヒ人良キ。且
は、ヨリ羅紗エテ、ほく東方乃湯ノ穴アリ。西
車ノよとくとおも太め毛と手レ賄物貞キ。且
モ、ヨリ北とテ、厨トヨシムとされテ豕牛、羊
脣教キ。又、膳、寢乃テ、小鬼奴也。人
皆、其子に見ゆ。年三十ノ通ミ。子
双持た指としらむと見え。ハ、卓頭ターラトモアラ。
ナ、身シルト見ゆ。又、面白ハ、彦良アキラ、名を
了萬リョウモンのあ称。功多モトは、少アラ。

鬼奴クロンボソ



鬼奴クロンボソ
鼻ボソ
江小舟ヨウコウよりヤヒトサヒヒトサヒ
衣ヒツのほひホヒふを更ハラフ
えもよりすりスル畜ブタ者ハタチ
キテ

寶ハラ大會ハラシマ此ハシマ大會ハラシマ
や、小舟ヨウコウアリ。此ハシマ山サン無ナシ
人ヒト草グサ無ナシ、葉ハラ無ナシ

按今草綱目云廣南有穆牛即果下牛形最小示雅謂之羅大會編謂之犧牛

厨トル外室を設けりて高圍ケモヤヤを立れハ取足タイトコ
ナナセハ、かひありと、ナハナ方の牛もとし。
角短く耳大く形とすとコト。時々之に渴穆牛
ナシテしげみれ牛もとたなまむヒテ、ナシテ人

道トレイウタ生田トモウタ放カヒ牧カヒとふ

おもへ乃姓名事人の語と記と、軀頭を
カヒタントモ年首とトモトリ、日雇既とテンシヤ、料
理既とコンハンヤ、料理人とクロス、日雇とタロスと云

一方ビタントモヤンガラス年三十四

一同ヘトリ名ハア、テレヤアハストウチアル年三拾

一己年トモナム内華有名ハヒトルコストル年四十二
一萬年トモナム名ハリユウトルブルイトンシトモナセ

一同トモヘアスナマヤンテシキエルリキトモナセ
一同トモヘスレキロユルコツフ年三ナセ

一同トモヘアスナマヤンテシキエルリキトモナセ
一同トモヘンケルヘルトスサカトモナセ

一セ季在島上外療ヒリツブリーヴナアルトトモナセ
一あゆ海トモ外療ヤンフランステホウトトモナセ
一季のうち上島の花火ヘルメヤンスフルラントモナセ

一西年うを在島の大工ヨウシケレステヤアシニキ 年三ナセ

一云年より仕當乃羅勃頓カスフルハンリキ 年二十五

一高基尋所れ漫 サンフレイテレキウストル ニナリ

外ふ昆裔奴ニテ四人合ミニナセ人

阿基米池船トセ自來ミテ九月廿日ヨ歸フ一被乃幸
從百人アドトモアガシテハシテシテ、定例アリ
カリ丹、因止留ホニシ人長崎役人ミ人、是、通車

ミ人ミヒテヒトナ人組シ自ナニ日其前モ先テ行
馬リテ、ニ戸ヘ來リ、三月勤目滿國シえあり

○長崎入津乃けタヒタハ東シ水ナニ子のモシ、船町
長崎官人間、横立テ又官半、合取ニナ五あレ、紅毛

ノアアツヒ人有リテモ自己モモナヒム一切佛事
ナシ、さの出港町を賣シ水ナニアハドヒニ迄ミ
南蛮人ト名シテナムアハ年の年ナリトモ賣入津
拂停止マム、今ハ紅毛の館ミ成リ、地子浪高
伊銀合ヌタヘ賣四百日、破ツ役浪主用テ、金少
トテニ西毛とテ紅毛人ナリマクサシトム

八 紅毛館

メ王制從來柔遠民紅毛委質在瓊津、五風
十雨西洋外勿道東方無聖人、

ヨリヨリ十禪寺九唐人館ヘ行、大門入金モ

三才圖會曰韃子人剗頂至額方其形留髮於正中謂之怯仇兒或曰鼠辯

牛云赤絲比目魚也

レアハラ駆ニヤム萬物の生ノリをよヒ時ニテ
チニ付ニ唐人五十人トニテハカニ御仰ヘトキニ
矣後次唐音乃ナシト相活ト用ヒテ有モシ其毛
人易仰ヘトニヒ而能ニテ方メノ人ヨウクヒトナリ
班髮ト剗ニテ而曾メアリト徑ニスルトモアリ
モニ髮乃色赤ニシテ紅ナシト而頭底の絆子似ム
後ヘ意毛トモ帽ハ整ヘシヤハタマトモアリ
頂の中央ニテ有毛而後東方めぐらシトガリト御ミ安
のナリニモアリトモアリトハ方比半金網ニ似ケル
鉢ナシトモ、筋毛蓑のちわきと合合シテ、お意ミテ
又細鉢

はアハラ駆ニヤムアリケンモ、而て後身ハ韃風ミテ公卿大
丈ニモルモト、衣つ村ト用ヘテハ風俗ニシテ

游樸菴



龔廷賢

面色赭薄

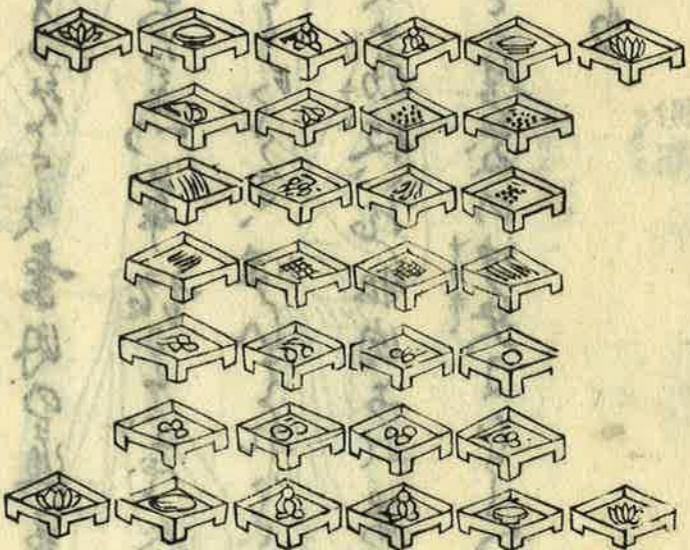
便服

襪子
皮鞋

青



おまくらをぬいての歌中門をひいてお秋常と被ひ
少より厨ト乃の後ト、う清よそのゆり傳ひつれ
唐人うるやかくも獨りて笑ひます、坐ひるゝ
毛氈をくまづきり案内の通事人高尾君
をくみのよもやまの華語にて唐人へかうひから
茶をくらひ、
錦地カステラ、荔枝、高麗肉あひ果ふと妻ゆる慶
てあす稽古と度まゆけ史よなぐねく彼のの
風とアラスモウ



あひゆふ人々のこゝにかまくらのそ、雪陽と
ふ人根ろはうりむぢち

唐人うきた船はりて秋うきて豈ほれ深接店

う字をかひとせゆるいとあへば宿をまへて
算決するをとえす、煙國獨りて亟く、喫食不
堪りし、寢事よれ前もあわてて、すみ酒院お
くらゆあふ禮生は、オチ様もん被地ひづけ
禁園あつて、貞享之年原、トウヒ刻多度
を、ゆき元録二已ひゆうり唐人緒とだま百
写る四家教格、ひやく、同じく、官事と、三、鹿
私ノ内ノ船を、定め、一、主の業うち、萬財へは
洋ぬの、ふ、二、艘、私、財、附、總、官、影、長、舵
ユ、頭、渡、亞、班、秀、工、形、板、工、舟、ト、下、と、見、ル、百、四

五十一人罐中より帰國するより

清客館

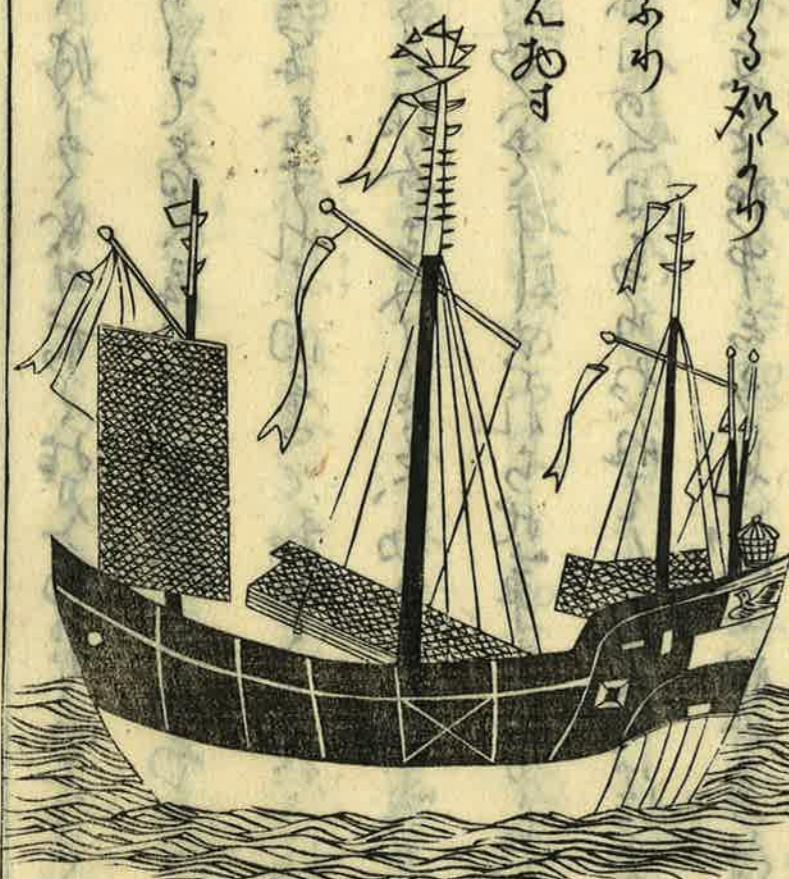
聞説單干稱帝王、年々亂舞至崎陽。當時
文物何須問可歎。衣冠狀漢唐。

まづりはるよちく唐船をも、
波ハ水の中央
ふあり、一般之ナ船を此岸よりは多く、船か乃一萬
私長を立て、石室五間、帆柱とす又、
袖さむよ所子の處と画、罐小窓後乃二字と
重文よ壁上より鳥と人と書とひやぐ、如て其
色濃青色あり、帆、毎忙と云乃あつて、
船とかけた如トウ

福か松艦の有り
斜下見る者

南京、福則北船、年々ナム艘半て入津を計
是をもろかとよらの方乃つ三百石積の松支艘
けくふ艘山を船と唯一艘ふほく来るよゑ、船れ
様うそ手あす

舟半千艘はりまちもハ
ちん水と水と水と石
原半千艘人ね六十今も半
くもせしれ、毎忙と云
意のとく化す二段合室て
うの家を守り度風の船
にまくとくねだく船六
艘はるよす



雨の日くはよりてかくはれとゆからまく實
うのれどてかく歸れ、無代をむかひもつゝわせ
あ事と穿もすれと因事とわゆる人ふはせ
後事乃と結合さとと、初の沙汰へゆきと
帰事ふれとよしむらや事もむらむら絶
えぬるが日のべよありわれもんほひて活めく
事の詩文をあやあやと、後子孫もて傳と
作りてうけとて聖朝能代へ奉
ナ又日云々すれ事もとく梅町経正御氣肆へ
次、そぞゑ文書をもとづとのが今て活ふ人

レ城郭の大明令宣れ大國と仰ぐ被毛也
サシ高、ミセシテ模寫モヤ本をうちしてくよ文字
乃キ謹り河流渓流のらうひと有、手一ノに
まれしも六太丈儀は懲懃ふあり互々姓名と謹
お識とする。海國乃亭へ誘引さむよて行、勝れ
ナウア額ひ茎、敬慎の二字を扁て、庄基也
と經營、あくまみ三疊より、乃乃祖より唐畫の
墨の拭ぬあり、榜題教教写真は拂く、或ハハ令
事を蒙る、又度東未れ小厚角も、もと來隸
予おらを競争と生てわざじち某トチ母桂籍

とひよ書をひしてそのの事變ありと云ふ事より
されば道寧乃ち草と記れ、而ゆきもあらず、すと
うの付せらるゝて立、立ともやうと書と解カタハシされとぞ大の書
一二漢て西壁セキと水窟ミズカ文学と感カクがく
取締トツヂえ、水窟ミズカもあらずと自ら題トトロ名と渝ハシメへと
じ、主裏シナリ毛糸モヒツとおまわり已に毛糸モヒツと呼ハスぐ
とたゞ御吏ガンリとひき乃用ヨウとて召サムし即ハシマる
若くさの後アフタ你生タマニ文モハシとモハシ御別モハシと唐人カタニ書シて、
而の上風アゲハラ也墨モクすなどとぞく

此をか所カタニの少、唐物カタニモノと見ミて御品モハシ也、詰ハシマり

とはひ福ハラハラ乃江寧エイジヤウと號シテる、二王虞世南政陽ジョンヤウ、
褚遂良ツルイリヤウ、張旭ザンブク、顏真卿ゲンシンヤウ、懷素カイソク、柳公權リウグン、東坡ドウボク、元
祐イヌイ、松雪ソンセイ、其昌キチヤウ、允明ウンミヤウ、僧仲ソウジヤウ、人間ジンジヤウ、而擣ハシマりて露モコロ
玉モコロと稱ハシマい、表モハシ映モハシと飾ハシマりて、あるる優モハシらり、手モハシ外
處カタニ本數モハシ多ハシマし、ひのうきを被ハシマ今カタニ如モハシ鞋モハシの價モハシと
て、未モハシは小モハシの字モハシ也モハシと有モハシ書モハシれモハシ也モハシと讀モハシか
されと傳モハシ人モハシと首モハシ摩モハシ動モハシとモハシ是モハシと之モハシ、唐人カタニ
の才モハシと書モハシ又經モハシ年モハシ、中葉モハシもと上モハシ快モハシなると聞モハシ、
是モハシと長吏モハシの職モハシ也モハシ、主モハシ毛モハシ都モハシの子モハシ也モハシ、
而モハシと、若モハシ主モハシの姓モハシ又モハシし、一ノ聲モハシ水モハシ先モハシに傳モハシ

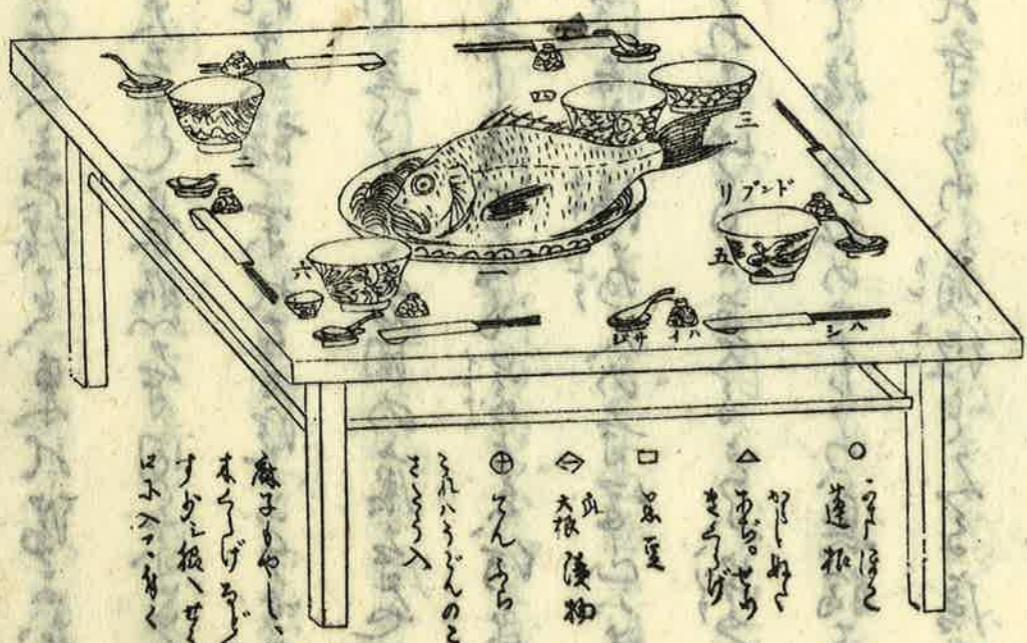
事を以て早と云猪衣乃肉
をもじらに用ひ、又馬反鰐了
海萬根毛子と早被とある
事演義は文も早被とある
事後もと景々の文公家元
が北車面をもとされヒツボソ
吉らへす西シテヨリハ萬根が
アヒト

して左底又來る也思案を考へ今よりまことに
手と猪衣而取れどもと語る、手と又萬根の
事と見られも唐人の事と見えて可いと申す
菊石の定めて御食事席の卓子といふ譜
事と出候、給仕のもれ小物もさへ乞う可い
一茶木廿六人之間、坐を食候、但飯碗を手に
すて是更草案へ寄合だり

卓子圖

卓子は四脚にし御足四寸

酒食の初のと有るもあくかお大鉢、素麺、鯛、



- 大鉢
- 二重んうんりけ
- 三治广豆麺、葛、蕨
- 四鯛、素麺、大鉢
- 五みそとタ、キ岩子
- 六そえ、志えべねゆり
- 七さくら
- 茶

卯、太兵、葱大鉢八道からい、どうぞばんざる。

招き候住持等、あつたき事はあり、山海守も
居たがるゝ事もあらずとも易らぬ事清し、祇園社、
清め堂、石御堂等作らるゝ事、未だ未だ様子皆有り、
眺望をうちなく甚く甚く、一因りす、トゞ揚色野
在、丸山奉合乃端坐也とし、是より西へ向
て、あ焉所、さかほは、新乃石火尾甚と御室の
所とせよ、あす本堂にて行ひ、わざを風雨俄々強く舟
流れ難く、中堂より歸る頃、又あるて御室よりま
詣す、中門乃庵より大學の經一事をせぐ、華人の筆
之、留像十幅乃像事にて宣教をよ左後寮に

十三、日神弘佛寺ノ主清志、東北陽水を運び
て法華宗乃大寺とし、長照院寺曰圓宗也。清志
も後醍醐天皇も、諸宗比左近院寺子也。清志
諸院院也。中國多々人云右國の唐寺也。又右人
の物入寺で建立し、此の事も是と云、何とぞ萬葉
乃も云し。福滿寺曰圓通院の寺也。又右院也。
又私見云人云れど也。其事も莫も。左院也。福滿
寺也。即非也。福滿寺の事也。又福滿院山
隱元南京人也。寺也。又、看經院と云。唐音。戶口

唐本改所と題榜と、此八唐船より室上乃書籍

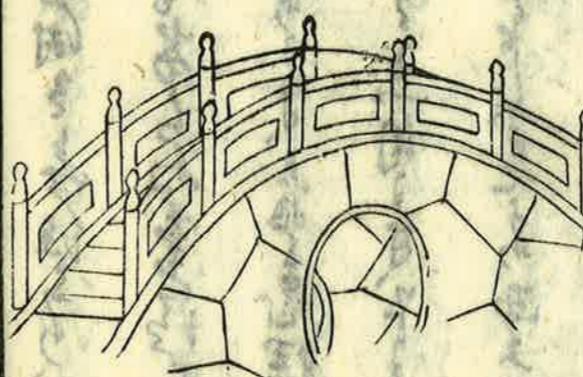
久れの所にて吟事公儀涉用代分ハ擇取、必ず
を活命乃も代入れどアヌアシテアシトモ、

書物藏と見て文庫ニテアシ、詠詩恨神たれと書

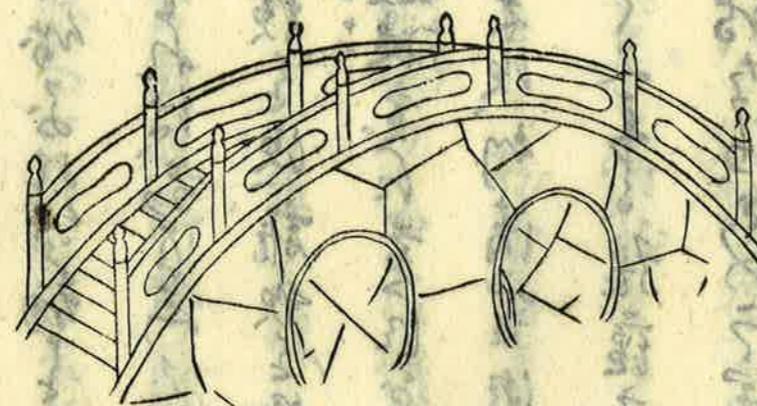
乃石垣大よりアシトテ是時ハ石自田の屋
石橋に曰く、大絶橋

圓鏡橋

大鼓橋



眼鏡橋



主水あま丸石垣石塔等は塗墨のとく是より
地主よよ稀なる事ニ、家く帰生ア燭をとる
主水色水左唐つらふも事とぞとぞとお水、即

西郷の和詩ある所あらひを首長唐物と又經
人の墨染ふとぞくあり、其れへ即ち序。每乃
お度てちまた嘗ての御事の用意終くあると
云ふ事上、ゆゑく餘あれ皆猶とすてあがる所
し、余が事多、されば、あはれ、よきあたまの
女也み、ゆきに之を教と波、龍歌と稱し、伊とまと
せき書徳らる、敏捷實に善能としげとに無
底より表一詩を表次、劉清客游樓庵を西移
知事なり、多き事々又、張遠文、蘇廷賢の
二詩ある和歌比詩なり、又、二宿一六月初より

詩文を綴り、無代と游樓庵との乞なまし、
室小而か乃ど、予も仰ゆく事も花
子と紅雞鳴ふるく、松さんすいと長遠大
旅被すてゆるやな鶴ハツキヤウノよき度饅もゆと詠
とすくに草シトよ食くを詠足

○主に長崎八紀有國波杵郡鷹富丸海と
瓊乃海もつて、天に乃く海長樂の事多め
とすり伊豆小長崎と仰化
長崎民とす。元弘
礼不効爲せたる爲甚る
子流落したる小瀬の浦
居立ちあはれす御乃候と
かと底とて地の底と
海の底とて地の底と

ハセキタニミサカ勇士を加
計ミテ越え大山のるを勢
滿山ニテ太刀萬石公
アシハ代の下に被立て
内殺す後ニ里人ニモ立端
ミキテ照威君之神云
追体矣

石高ニテ石室參めまふに於又、男女數五万武
ニセ百二人、橋基ニテ、私敷四百枚、町と年を
ハ人内ミ人双刃つ丁比内乙名一人、鉛頭テ人々
ミ、其腰が底意乃け、先ハ元禄元辰トドム
テ人モ一毛が無く、主山乃ち今不居れ、海濱
ヨモ西ヤレキモトアリ、若原主大清因附ヤマ
勝山町以清代官主日本氏アリケ、船屋も人堂
ムナウキモトアリ、主も禽獸トハ、あか
ミトウキ、アホリ、アホリ、阿萬御許アリ、福昌侯、佐望侯
アリカハリニヤ歟、並士、足輕、小主、又者モ

船合ハ百人隊アリ、常流、船モニテノ被立て、大
波戸川詰者、船主無事候、主事、原候トハ、又ア
吉年又は、船主トシ、公儀乃浦、私藏五軒、私
五艘、新地志唐人船丸軒、洋通船二軒、船頭
藏主江口浦アリ、セケ處乃連城鏡臺ハ、承
應二年也、松濱侯の御禁主多モトアリ、
大波戸岸、串灯の竈、寛立五年、唐人船事
中ハ、食糀て建了アルトアリ、時乃鐘寺義町
ナリ
○紅毛船是時ノは未乃酒會主酒、御酒主酒、御酒

成林の西川氏がやんだ
乃平少て人の國を至る
至る乞子ハ百日と往く
も辛ふねえれす多小豊
そぞ詔せうすす今我邦
ノ事の為ぬ者と世人今思
利かねばあとせらふ破れす
事とぞ国人素輓多め
もはやおとひのいは

やまと阿蘇陀乃志國へ言ひて既絶の方
千里に亘り、お天よりハ成の方よりてをまき
ふたり、國を古ム平波爾西とす、國人の西又
白くして望乃多ホシムが後あくまく
世界を巡行して立場をもとめ、ソラをもとめ
けまねた國をもとめたりと利サムおのの
属國を領す事も安也云乃よもみよも
アタマ咬噏ガタラ吧游あり、長崎より諸路程より四
百里ちりとも、中古已來わんわん人々の渡る
うといゆて殊哉其の如、まで世称羅馬也

少代宿主と云ふ事在國より年々貨物貿易。其の咬噏吧うち萬方乃諸國へ通じて其の後
く賣買する。由是不思國將來不外乎此也。すな
はれ、^{二年}に之を以て即定す。すな
はれ、其後來る。船と曰ゆる船ともは多矣、
其の長さ十四丈五尺、幅二丈八尺、高さ三丈五尺、
帆船長さ十丈又五尺、幅一丈六尺、高さ二丈五尺、
竿子丈又五尺、帆柱十八、石火龜三十六挺、卒船百人、
縄、檣櫓、津内出入れば人情を知りけりに
而火矢の室以同主と云ひ、^{二十}度日二挺、左右各

又向處船も入港せず
とて百國船も來ず

在東西公事の事無く

臺灣石炭の事、莫少
支民總主の軍用物食料
法人主事局
石炭今八公司社外港
とて給ひ。是れ

く手出しへ、門をひらくと出入りし、船
うち泊中地主屋内より、列へて待たるもうち
くするもかえ未紅色ハ西堂にて泊城し、弱者
は至れり、新経毛とどきるが如く、彼方にても浦
浦駕れく、船を転かへりときハ、あ萬の薩摩侯也
ふちるをましで、ま縁もて、漁也と聲聞す
福城へいつと九月廿日、主君不屬候矢弓の御と
之年終止、家をへて、官の持つて、沖の時既遠
見あらうぬ千里流、空巡曉まで、帆歌えどすと

トキメカ子

注とよよて帰城す、佐堅乃家老ハ海壇ホウラン
き黒田氏、福島の家を主と定められ、鍋島
氏しげ方にも用ひよかき、且、セキモのアツ火矢
巻、鉛弾大津戸サシタヌもある。ハ石墨の高さハ丈尺、上
又銃二挺アリ、前後三度、舟、唐銅作、漆と
横身一挺の船、肩を代亦の便り一人又は、船
確一年入代衆、宿舎ナヌ、其ノ實、人、石丸ハ有
石主て小豆八斗代、主とどり、船運里て、船
又、ばら木舟と称す、ハ主と富士て、寳清中央
漏金も降り人死を主て、因爾とも云、是れ人

乃様もとどりてひよとすと、遠くをゆく事へな
れど、此を内に抱石イレヒヤにて置きあわせ、
況えれより十日されば、まことにとおる

○秋松乃は、多忙ハ詠游、ハ陽、伊勢、毛家、大神、
吉井、福島、おもかげと、てもか月九日詠游也
多忙大會と、まこと一月以上て、多忙と詠
町、まつ鳥年詠游也、妻女も皆ら此を詠游
とす、極と比節もと車月としむる、又詠游
詠游文ヲトヲ、とく人ハ、おもの詠游してとおる。

主水乃とすもと、唐や紅色面波キヨツバと號する人
と一人とせに、馬をもふた人が、赤馬乃半
ドリ出れ、やはり日本をもしげ、ハ、も波の度
國人すらす外をアヌを許次、おもとすと、物の
彼處ある、と人ひと波に詠化され、物の度
彼處ある、と人ひと波に詠化され、物の度
町中比年、年中英一乃状報じとす

○長崎古産品物

眼鏡、靖子

時半天文道具、象石、

眼鏡

唐金道具

花毛毬

象眼

鈴 宝物屋城源唐丸 花多 扇 傷唐紙

造茶 錦香 根今弓橋の宿 徒巣 後漢川果 改巣 也村

安 瞳足袋 玉細工 吉延 造冊改珠
外療道具一式 唐船細工 鍼

弓橋石工 唐様 鬚紙 錦弓弦 煙草

南風西風 八升豆 陰元豆 シロジ ジヤボ

密棋 大木信 杏子 流改芋 唐草子
テ袖

類 萬葉ヒヨンハイ 胡麻絆 沙糖 白墨水

烏羅保衣 香沙糖 大绳錠 ヨウモウ

糕 牛皮 賀良傍頭

○南蛮果子

ハルテケニアット カステラボウル 花ホウル
コンヘイト アルヘルカルメル ラヘリヤス ハア
ハアスリヒレウス ラアドウス タコソウメン
ヒスカウト ハシ 左の外若狭奉之 シマサ

長崎

瓊海通夷夏 百年佳氣開 客重譯語至 船
載貨財來 土俗皆華麗 士人多俊才 可憐

山水美採筆暫徘徊

十七日寅初甚晴とて立日見午前半纏身衣

ナシホリ先を出立候馬にのると等
三里あまりハ矢立驛あれどて見送り代也、麻
社下見をまじで海をとめりて帰る、横町に
住人共も尾を左手の船をひらめかしの日を
大村ニやむ事と、大お役二方ハ子石作、是
處に、また人代あらず、みはは海とて海賊子
とよとよに觀じて漁夫、義士々とて活かす
格りて立候と許さる、鰐松里子般なり、首
朱塗あり、うごらのあらせ、義士も生きて下知
さるし、おとも名前とたてあらぬ、一萬二萬

金ありて、まよやれること軍めぐらとぞ、
やう戸する今波音とぞ、舟をま回船の有あ、
船かと因松乃子と、且難ハハ子とあらゆる來
事とて一筋よこむつはるやうな中代わく、行
年より大魚おとく、そくあだらんとぞ
十八日宿疾癪、退院の有

十九日神游

二十日山遊、びく人寧育、由からん

廿一日日本屋乃康

廿三日小倉は着く、留まつておふくの町

あくアトアシ、町家も駆、の處に松の尾アツ候
ナガミアリナアキナモアヒヨ、廣木山瑞穂モ
トコムチト善提所モ、給地三百石在籍即
派乃安暮タリケモアモ遷化モトス、も傳され
シテモセイサセ、法事と善事不渡^{シヤウ}モ多ヒテ此れと
小笠原の生歿墓^{マツ}ノ内額ハ安國元長局記載
矣と、碑端淡^{シヤウ}アリ長さ一メートル、主な作
乃室主^{シヤウ}皆有^シトモアリ、石垣、石塀、室主^{シヤウ}備^{シヤウ}
トモ活候の墓あり、寛永ノ後^{シヤウ}ヨリ少^シ改^シル
乃像を安置、主御、處の木ハ扇^{シヤウ}心の拂^{シヤウ}アリ

名^{シヤウ}トモアレぬアシ、諸額、^{シヤウ}標^{シヤウ}、^{シヤウ}カハ即^シ非^シアヒ
諸^{シヤウ}本庵、法雲、乃^{シヤウ}事ナリ、就中^{シヤウ}萬^{シヤウ}大額ハ第一
圓^{シヤウ}三門乃^{シヤウ}般^{シヤウ}舟^{シヤウ}船^{シヤウ}、^{シヤウ}萬^{シヤウ}印^{シヤウ}の多^シ
文字活^{シヤウ}動^{シヤウ}す^{シヤウ}アリ、^{シヤウ}阿^{シヤウ}ハ時^{シヤウ}消^{シヤウ}アリ、
延^{シヤウ}族^{シヤウ}身^{シヤウ}不^{シヤウ}アリ、^{シヤウ}又^{シヤウ}萬^{シヤウ}を^{シヤウ}組^{シヤウ}ハ細川家の^{シヤウ}
うりと^{シヤウ}也^シ、^{シヤウ}か云^シ有^シ乃^{シヤウ}此^{シヤウ}の經^{シヤウ}母^{シヤウ}、^{シヤウ}大友義統
比^{シヤウ}半^{シヤウ}額^{シヤウ}又^{シヤウ}京^{シヤウ}於^{シヤウ}堂^{シヤウ}上方^{シヤウ}也^シ、^{シヤウ}又^{シヤウ}松^{シヤウ}紀^{シヤウ}の畫^{シヤウ}
茅^{シヤウ}経^{シヤウ}の跡^{シヤウ}物^{シヤウ}ト^{シヤウ}御^{シヤウ}アリ、^{シヤウ}年^{シヤウ}少^{シヤウ}ニ^{シヤウ}アリ、
より寧^{シヤウ}府^{シヤウ}の苦^{シヤウ}病^{シヤウ}の詩^{シヤウ}或^{シヤウ}歌^{シヤウ}アリ、^{シヤウ}又^{シヤウ}少^{シヤウ}ニ^{シヤウ}アリ、
之^{シヤウ}翌^{シヤウ}日^{シヤウ}少^{シヤウ}行^{シヤウ}乃^{シヤウ}音^{シヤウ}あ^{シヤウ}シテ^{シヤウ}慶^{シヤウ}ノ^{シヤウ}見^{シヤウ}娘^{シヤウ}

ナ故にかり、堆朱のすゝと象は唐筆墨大と裁て
是えうて詩をうちれども、手りやより書に於し、
やまととえぬよの筆意の如ハ多乃の字也と見
事ふやて貴を塞く、すでにとおるてある
よと流れを絶えぬ中の食用とて奥等一毫
館一室とあらわり、三友筆とて小倉乃石翁も、さ
トモと男兒て云ひ、女四日か五日を貰ひて書
拂ひえ、日暮と清か一晝度ふとすくとあら
きみの刻にて開き、
女七日延のひよ西向へ隣へようそづ龜山の宿

ノ高台と、洞玄洞窟に引ひりて風雲
あり、此よ後より是と云ふ所が方には御詫
ちも、ち傳とてあゆむ、安徳寺れ隣のトト廟
有く帝れ本像と互易し店の隣のみニ伍尼
内侍及び平家一族の像と画く古法眼、元伝乃
筆も、次の庵庵とての祖、紙金張附木やめ代は
吉良公致れ姫院とある、古佐を信う事、
後れ山亭は壇乃浦入水の入水の石塔あり、
志水寺とて一體手作る。

謁

安德帝崩

海邊入古寺、帝廟自荒涼、華族僅画碣、戰
圖猶畫廊、幽燐飛野徑、靈鬼哭沙場、一自
失龍劍、至今長斷腸。

密敷にて宝物と見る。左侍門等はらかく、正
新所れ造綱旨又通、湯氣蒸氣也其事通、尊氏
御事アカキハ御ある(造氣也ニ用)、豊太閼の經冊、
左衛門、大内、毛利、吉川、小早川、竹代
書あり也、右の事の主を御あんと一毛數人乃至
少すれ、せよ其の御御事も存するべし。

たる、要領をすば達別海よりあらうと
議りてぬるに、専門者よりして候がまゐれども、
よの新義これ剣の底からくる。能くも直道確立
太刀一振立ち起る事無し、貞観えむ行焉れ
あるか割より力百倍とする。あくまで大弓安
治多は法令をととのひ人野々弓弓可と云、所へ
て弓の理を宣べば石ハ弓地の滑材より出、轆轤ハ
空氣が少回の済大橋以下を知る。又地ハ木器の如
きも門司に來せらる。人家數十軒平生入はゆかぬ
故西岐屋は大坂は難あり、ひも町とうふひ居家

あつ、をかみの御高めども大よき事われ、浪三百用
はまよすものわきハ係とも無く、之の御幸日
大坂乞よ無からず、意をもへば、之の湯浴ミテ
ありも度し、薬水木らづひ所も勿らん、間々、
錦ともちるも有、淨うらひ義令シテ而見見
ありより、惡方、あら事、ヲトコタテ、御使、法師、奴ふと皆也、
うどけがされど面白し、召わ人す、而湯屋の素
内も入らず、事のみよきとれども極て人々とぞ、都門
乃約、シナ、御室、イシナ、御室、サワカレ、御室、志し、サワカレ
子もハ、事もよきとす、我後、シナ、百人とぞよきとす、橘

ざくとから乍りとて果子を賣、番内を賣人ふ立ち、が
まれ、うち端、象耳母太田、久松、甚波乃御、ハラヤ
とく物を賣りとて、番内を賣人ふ立、
行もと後者へ移ゆて、事もうち、シナ、
とふ、貯貯やとくとくと云々、事も、我、ハラヤ
儀房、ハラヤ、鄭衛、聲女樂、ハラヤ、記、
你不足、ハラヤ、不人、ハラヤ、乃風俗、ハラヤ

戯賦遊仙窟五首

其一

深入洞門裏、樓臺別有春、世間都不管、應

是避秦人

其二

仙女顏如玉、合歡盃幾傾。可憐琴與瑟、猶有鳳凰聲。

其三

美人長袖動、並立玉欄干。為舞霓裳曲、忽疑到廣寒。

其四

銀燭瓊筵上、青精與玉浆。樂哉仙窟趣、亦自似劉郎。

其五

燈背金屏暗、香薰錦褥開。陽臺雲雨夢、忽

向枕頭來。

黒人乃あくさり不殺體の使東聘の時、ハセウモ
シハ不順ゆル小室モアキリ矣。あれあくハ源と經
て亞非(漢)省私次、又朝鮮乃渤海。年々四艘
五艘を専めの少使、一帆流ど、強地とまく。倭を
夷正と書候。ヨリナリ。前馬(先駆)と云ふ。トノ
案トナリ。壹波ノ五十一里、壹波モウロクノアモ、モウタリ
船泊(船泊)四十八里、シミツヌカム。モウタリ。東風ア

はくと日暮八日西風と、北風と東風と人せよど、

安あ記二卷并觀流海上鳥と仰る。

十一月四日又は本郷とを離れて此處に來りて飛
鳥と見方れ家様と左よりて上の森へ伐れ
也と云ふが事なり

もく、やく種と有らばくあり

又自古と云ふ傳牛し満五里あゆく大島とす
とみるに和歌山と申す所左乃方ハ岩國志と
者揚し、道風とひびて見ゆ

六日は風とくさむ風にて、潮と陸と見るが風
半強と大河のほとり、さらかねと謂ふれと風

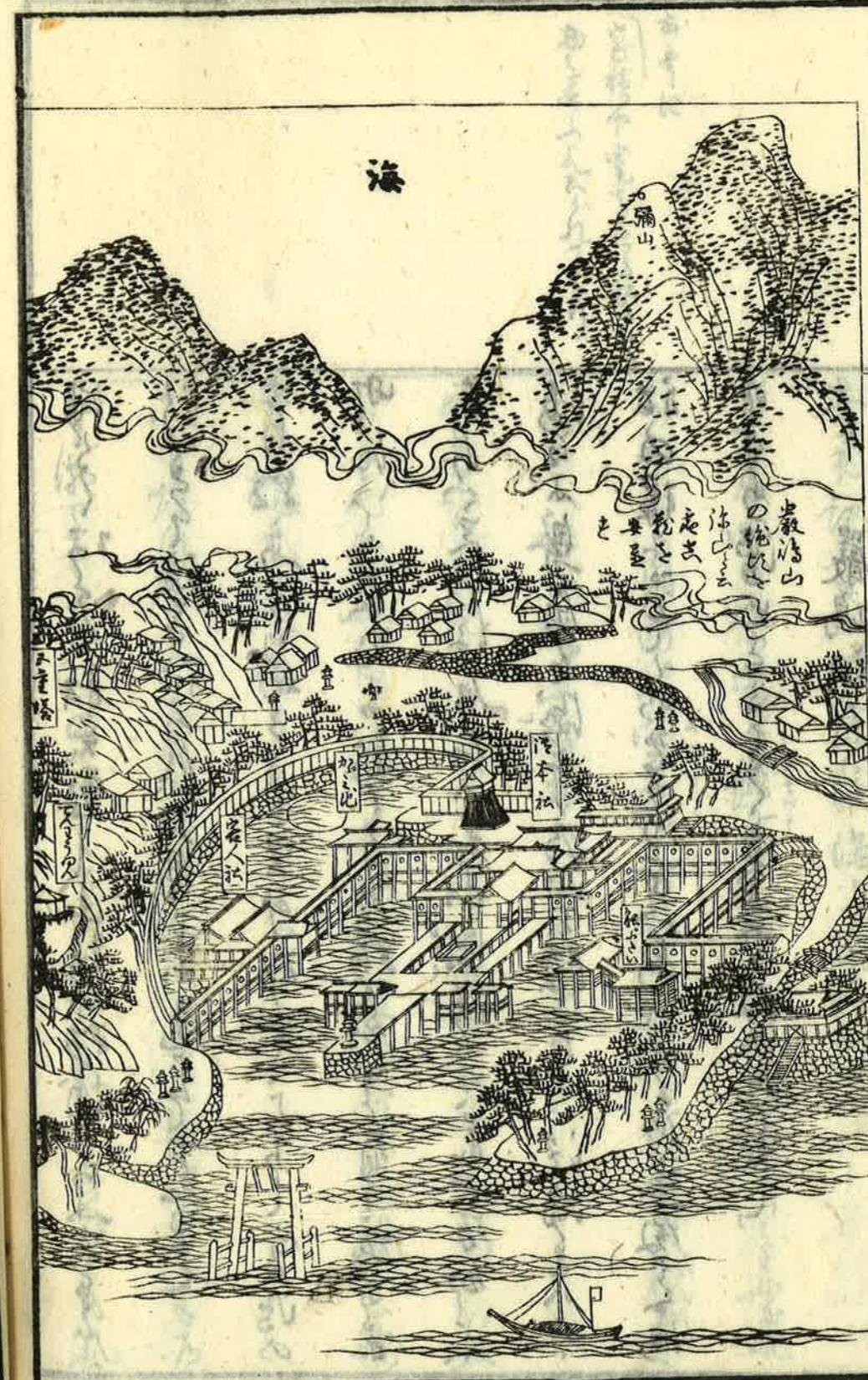
宿はくとくと松林と山邊の松浦とよぶと
川とて便とたるに、大島と見よして三里と
有れあくちかく三里半松いとよとし、宮崎の
町には、豪族と號する者と有て、銀ある
あり、之のほおとおとおとおとおとおとおと
海とふ鳥居と海と人間となりけりと本
法の様とすとおとおとおとおとおとおとおと
中より湯をくるとく実ふすの状況と

嚴嶋祠

島山秀色鬱雀鬼先見海門華表閣、十二

嚴島圖

樓臺浮水面、忽疑婆竭城中來。



かく處燒りて有る。かく丈強表比紙八枚書之
嚴島大明神と云平瀬國乃事也。裏比額。之經故
貴。鷗人御手とある書なり。小聖並風ありとひても
筆。急急。筆あへば。行。し。當。於。市。序。鷗。今
も。權。右。天。皇。の。と。に。此。現。ゆ。る。元。六。市。序。鷗。と
り。も。甚。厚。佛。か。豪。昌。し。辭。天。代。鳥。と。称。し。此
神。の。清。石。八。九。人。も。れ。し。本。於。ハ。西。向。國。都。下。

らあつて、お商人船有兩向と、竹生島の安土町のと云ふ
是を湯津姫命などとし、伊豆ノ島中百八の炮
舟底木は映トと難ト、小乃方岩山の上に五重の
塔と、千尋を越れ殿あり、四方は松子にて眺望に
洞庭乃岳陽樓とも云アし、主に西ノ社、又ナニ人の
お城、守ナケリ、一方の松傳を、主城より下る處、
市立年中にはま、心中六角ナシ大乗院あり、清
音寺もその傍あると、海を隔てたの方に行り、あら
長浜、大元まで、門前ありて、お城ノ前、又は曾経
あり、主に僧人清國より解説してあるが、被差は済

瑞漏、銀坊、五女代歎はぬめり、まかとすみ乃道裏

金持玉なるぬまの船人を、多津の少く、けとみ
多津に浮きとひぬむ乃方、アハの軍の河
海流也は、三月廿四日、豊後の源氏船に、自古有
りと有本の三大市と云、ゆめくもよき一船を、
赤松、梅林、生れなり、高石怪巖の下、よがね松風
里八字、絶頂より、あらわの諸島の、度、もの甚スキり
船を以て、主に移景乃地あり、したがて教主を詔勅給
鹿猿多々と、鹿ノ町幕主、詔勅しよまともありそ

食を來し、兒女をもれ別て觸り難い魚と餌我

店にて角波宿をゆき、町家と旅館と宿を

皆角波、港の外浦より根津有松をまわる周回

せ里、中は島諸島ハアケ山あり、島の邊に多種の富

島あり、七里浦うちを也あらひ

す自作善方に於く小屋をねじまつ

ハ日かんとの迎門、出で、計をハレテ手お忘れ

字なや一のぼらを、まことに御の居

着所なり、水の邊に瀬戸内海に面して五輪石塔あり、前

門の少焉まで猶迎門のまことに舟底を

古事記

アリカシヤとおもふ

ミナマセとおもふ

九日忠の海を過ぎ、町北宮へおもむけたる所より
津波乃島船百艘ほけるを仰ぐ今度は出入り船、船女
もまづくほれき新入り

十日あすとれ迎門城を左の岩壁の下に親子を襲
撃し、子を死に使はれ、父が廊下とす、床の間と通じ、通じ
絶えし下階にて、腰と頭と足と膝と腰と足と頭と
足と腰と頭と足と腰と頭と足と膝と腰と足と頭と
足と腰と頭と足と腰と頭と足と膝と腰と足と頭と

乃郷の浦左近に至る瓦屋自破、あらうと見ゆ、
まことに風と私走り瞬息乃方に行ひ、日暮

宿あり乃日比より隔て、忠の海をうち二十三里ある

卷之三

十四日唐琴、浮城を出立。午窓の津を越へ、佐
々木乃は左の道をゆく。猪が家(いのいえ)の、中國一
の本城(ほんじやう)也。見比よりナセ里あり。

十二日早朝より少て晴れ、夜は少く雨、風も
あく有らぬ地を歩き始むと云ひけり乃
澤ノ村を溪谷を下へ、七八里、鳥巣、私窓等
チモノヨヒコミ

室門の外に立つて見ゆる事無く、甲子年正月
の事也。此後乃ち御景物の如きに立候事大抵
の事也。其の如きは、高麗紙の如き成りたる事
御本の如きは、高麗紙の如き成りたる事御本の如

見此是因緣未可輕忽。向行人處。人情曉乃堪。

、常より二里半行て津乃瀬ハ橋五間あり

三里半程此の村
ハナホリに高乃橋を渡りて見附の門を入る町聚
高ノ原と名し、四方各五里けうり町聚れ水を越せ
國、周つて壕あり石垣あり、それへはよしむ乃大

門うよ、町家とすて城郭の中に廻る。ハ他處す

精良の事、また西南れどもに天皇宮乃様御基
廣大也、布施して年老れかひものを以て仙波了
志をハ居思ひり、ちとまくらゆゆ行はまばんて

はとてやまとあわて書字ひよきまくらうちある
まとほりと傳すもしれ事れおあらせまくらる
て音かれど美空へそより二里松木入で金村ある
じよぐれとま活まくとより人をあれと今度登山
ましれはま活れ根もくし草席因縁のちよ人
勇氣と進と今度と自らかにハ活く同行と活
仙波うちみナアあがのう田北東坂をみゆくわす
くされと日と秋活れをうちくまうとられとうハ町
羊腸丸折れ坂と攀び坂と渋くニシ門よりまく
不吉院ましんナ坊とさくよ、路乃左の萬葉また

觀音殿向とを看むけ作りものとて本堂
改め造る経堂並中と足代廣大あらぐうとて
鐘前も、う、う所せよのはりて本坊乃多門入
紫内院乞は離僧ちく聞導以、即ちれまよ室山
象寺あるて、就也至く食堂上行宮、鐘膳鼓樓
あり、勅額あらうと、とも夜あれもそと支ひ、
又主塔三つあるて有し、或ハ號牛とほれと今ト
なし、諸堂皆後醍醐帝御とよの道當あれハ志
かくと、食せれ後ふ安きの鏡井も、モ御景を多
候、林原侍代靈堂在、式丁子上に軍の持室の志

題曾根偃松

聞道管公遺愛松盤根偃蓋鬱重之高風
何備大夫蔚長帶祥雲似臥龍

偃松圖

今計太周一丈
八尺梢二丈三
尺枝自坤至
艮二十間餘、
自乾至巽十間
餘其間鬱茂
如偃蓋、每枝以

木支之百五六十本、天正以前

枝葉甚盛、天正中祠宮



罹兵火、此時西南枝燒枯云
えより
とよすは、保ふる石乃實那
と、因て此徑を經て松山を登り、ゆりゆ
ひりてゆめ碑のわかれとておなづびきり、中を駕
けの下城あり石敷を有し、殿を有せれど
石山を圓宮方に祠の傍を有す。故に刻々四方
を計一トハ離きけりゆゑふ所立事なる
え、來てすとおもむく松山、祠の左右めぐらに
大石子大の木、立高位大の神とぞ思はれ
けどもうちへ古御殿坐す所と、室は大已貴、少

大もじらててなまき名を
手てにすりてのひを

いはれゆる

元氣食なしし、まぐら四五丁あくちに傷み
乃所よ高砂道とおれあたり、本丸は方へゆく
日すとてに暮すうち、十丁半ほどまを海濱を、か古川
北山道と、さる等とて道はるをとるが、流して、流して
とそくにまくわに松、尾上花籠、松木とへゆて見ゆ
るをとく。何のせん人皆木と牛としおはまく草木
たり、中連ト加古川へ行人とす、手とて、つぶすて
強ていはまくひや町をさりて、まく神之宿、松
の御ひてひをとむを提灯、とけとおれ、とせばと
牛とてまくをう。昔代松生の今なる八柱つまし、



古松圖

大と云天正年中兵乱

時毛利家に小出氏代を

為相手

今松相連生如古松圖一但裏

連枝二幹細小耳

元禄年中國主本多政武公

命使種云近代權大納言

藤基賞

おもね松久より世の松と

いじゆくまむかみが生松

一男松女松ト云ふトハ和俗

ノ附會ナシヘシ唐ノ名ニ黒

紫赤松トアレトモ昨雄ノ付

ナシ

序極ア男芸女松それゆくまで神なり、ちゆの里
を家造りヒトモアリとて、引抜いて居候はと經

て舟中アヒト、ち岡山と仰て天代お松と名れハ里
人業因一島乃下と通り山^{アカリ}なる岩谷、往古

壁穴の糸糸井アシキとあれことアヌ、河東へりて尾
上吸神比翁あり、門拂^{アタマ}ていふ事多^{アシカ}す、夜

月升^{アシカ}り、とまくに門を敲けハヤシく紅葉は
詠宜出^{アシカ}て西へと詔禁アシカなりとひ、遠國の有

主候うとゆくば只、門を守りて入る、而済ハ
住吉御前清文、承了鐘^{アシカ}、御事より上づかみ

傳說曰神戸三韓凱陣ノ
時龍神獻之ミ三韓ヨリノ
獻上ナルヘシ



いとあやに落葉も流れハ流れ也ひ難也。
銅色を秦^{ナカハラ}ノ木綿^{スリ}と衡と銳と細密^{カタ}
文あり酒^{カタハラ}樽に之女也像と萬有^{カタハラ}也其^{カタハラ}事也
みるすい。是^{カタハラ}又かの物也。此^{カタハラ}もよおき
の松^{カタハラ}也御^{カタハラ}と^{カタハラ}行^{カタハラ}種^{カタハラ}之落^{カタハラ}葉^{カタハラ}松^{カタハラ}也、其^{カタハラ}生^{カタハラ}
落^{カタハラ}て其^{カタハラ}肉^{カタハラ}也。其^{カタハラ}加古門^{カタハラ}に^{カタハラ}ハ已^{カタハラ}也。
十九日、明石城下^{カタハラ}と^{カタハラ}宿^{カタハラ}也。町の^{カタハラ}居^{カタハラ}た
所の傍^{カタハラ}余^{カタハラ}の^{カタハラ}所^{カタハラ}も入^{カタハラ}て^{カタハラ}所^{カタハラ}行^{カタハラ}向^{カタハラ}所^{カタハラ}
保^{カタハラ}庄^{カタハラ}也。其^{カタハラ}庄^{カタハラ}の^{カタハラ}裏^{カタハラ}有^{カタハラ}石^{カタハラ}樹^{カタハラ}ノ中^{カタハラ}碑^{カタハラ}也。其^{カタハラ}碑^{カタハラ}也。其^{カタハラ}碑^{カタハラ}也。

忠度墓圖



之をもとめ、其の後もふる、若くして年少と
城下乃町場と、旅宿もとあるとてふ、併ひ着服と
原虫國と、其の内に生じてからが、虚無の如きと傳
而て題す。而して之は能む。

傳風雅名

樹陰橫槧又一曲。寄花情。縱使骨猶枯。長

旅人の手にかかるたまは
太き者とあらわす
平吉と名後經冊
御内侍て不思トシテシカニ
を反對やうへのあつてあら
ハシモ山峰も源也國
今も忠復りれどか
所の如き甚だ多くある

湯川に仲哀帝の陵あり。石塔。元
よりお猪の界川。川の下も水流也。即ち
谷の西の不戸、然後、草山、一二の驅を率し。す
敦盛北暮。うち酒アラモトハ先日。朝ノ御前
を今り。勿勿。ふ行る。草部。草塚。雪峰塚。経政
と毛利塚。げきに至。而れとおや。村山院。いは
り。また。寺は。大原乃入。草木。わほみ。の。ゆ。行
事。毛利と。銀河。銀河。人。毛利。の。塚。また。跡
の。毛利。毛利。毛利。義賢。の。塚。毛利。毛利。の。塚。
田の。毛利。毛利。毛利。毛利。

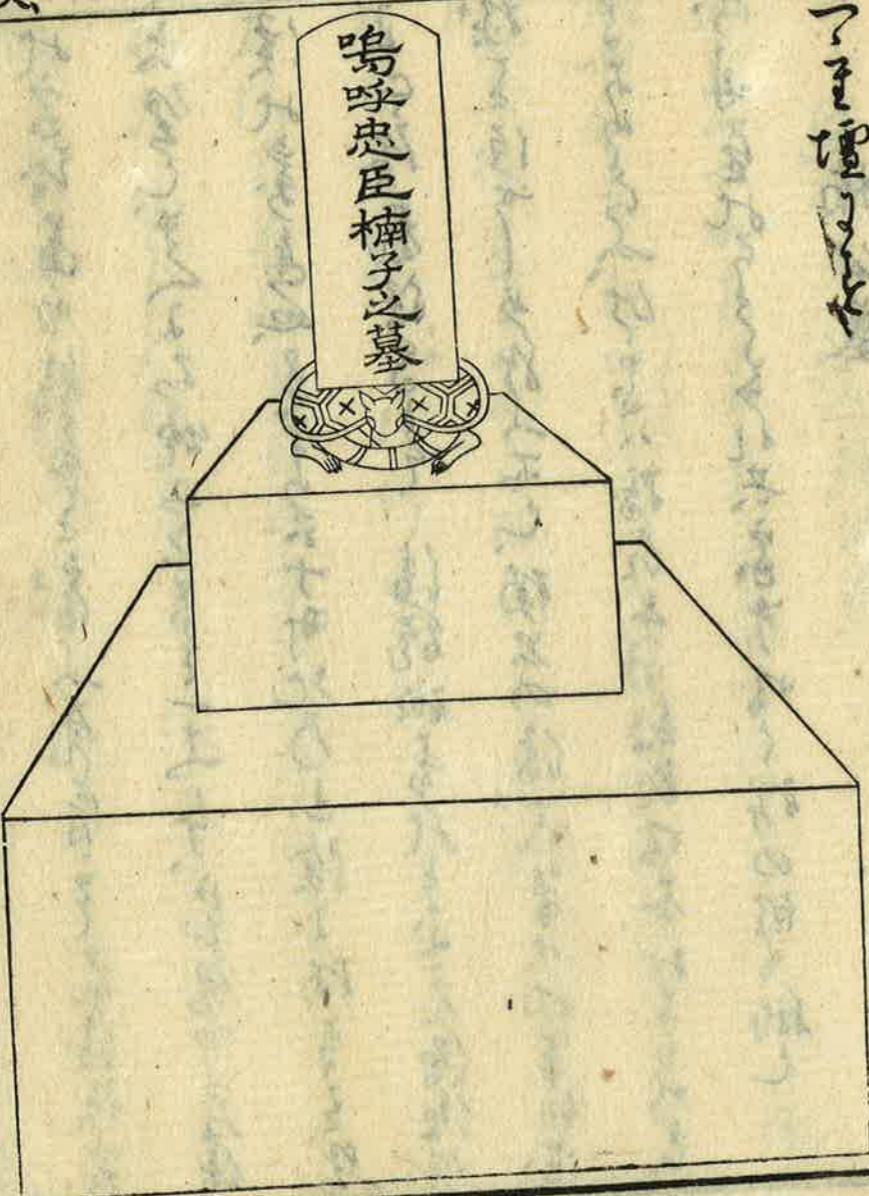
長山行社

石塚も、お隣町に建つてゐる御茶の数萬でし

まくしあなた事よりは娘能う物で莫れをとる
思ひの外に喜びあがへ津にむかひてあはせ樂の
乃来延年じよめくとて、のん人情とて、活潑の
小姫様と、ゆきどもりよし、車ハ鑑鏡と説く
サ日未ゆよ邊りとぞくらべばきのりきよやく
水まくすゆふは海とあるとくとくとくあるの境
高し、かへゆきとせんく、ゆきとせんく、川をさ
かく、いとむかへゆきとせんく、ゆきとせんく、楠公乃
碑ハ大おもむりて二町ほどのもの中立

萬代先生之教云乃之謂也

卷之三



碑石、堅立九寸、橫一尺。上
寸、厚一人、青石也。中坦、堅二
尺、厚六寸、橫六尺、下坦、堅五尺。
橫一丈、共白石也。碑面
嗚呼志臣楠子之墓
之八字、八分字而
源義公之親孫也、擬孔子
顏延陵季子墓云

碑文曰

忠孝著于天下日月麗乎天，
天地無日月，則晦蒙否塞人心。
廢忠孝，則亂賊相崇，乾坤反覆，余聞楠公諱正成者忠勇

陽子はハレハレと笑ひ、おもに因縁はな
きふうをとる。

題布利飛泉

千尋布帛，色長瀑碧。石山隈織女機中，物應

方正集

右の方へあまじゆ名村といふ、まことに本居宣長十
年ほどのうひを、宣あまのやま女郎^{ラトメ}、二男子
乃娘^{カニガイ}といふと申すが、また武の者少ひ固むけ
て、かくもと生れかに、たゞ八六甲山天子を擇
ふ翁士^{カニガイ}ス^{カニガイ}アシムレ^{カニガイ}、清輕の事、
空色^{カニガイ}、芦

卷之三

之行之不休也

2

2

蒙古文

御内閣

卷之三

۲
سی و سه

卷之三

和
文

卷之三

卷之三

丁巳仲夏
王氏之孫
王之誠
敬書

卷之二

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْمَلُ
كُلَّ حُسْنٍ وَلَا يُؤْمِنُ

也猶北行。此是尼賀一領也。流多也。西行も
宿川に江は北里も。宿川江と左きも。後方を左
ヒラカタ

卷之三

卷之三

御文庫

かくもあと、かくす。花

古今集

ゆうひのゆくの様

後漢書

卷之三

100

卷之三

11

卷之三

1.

卷之三

27

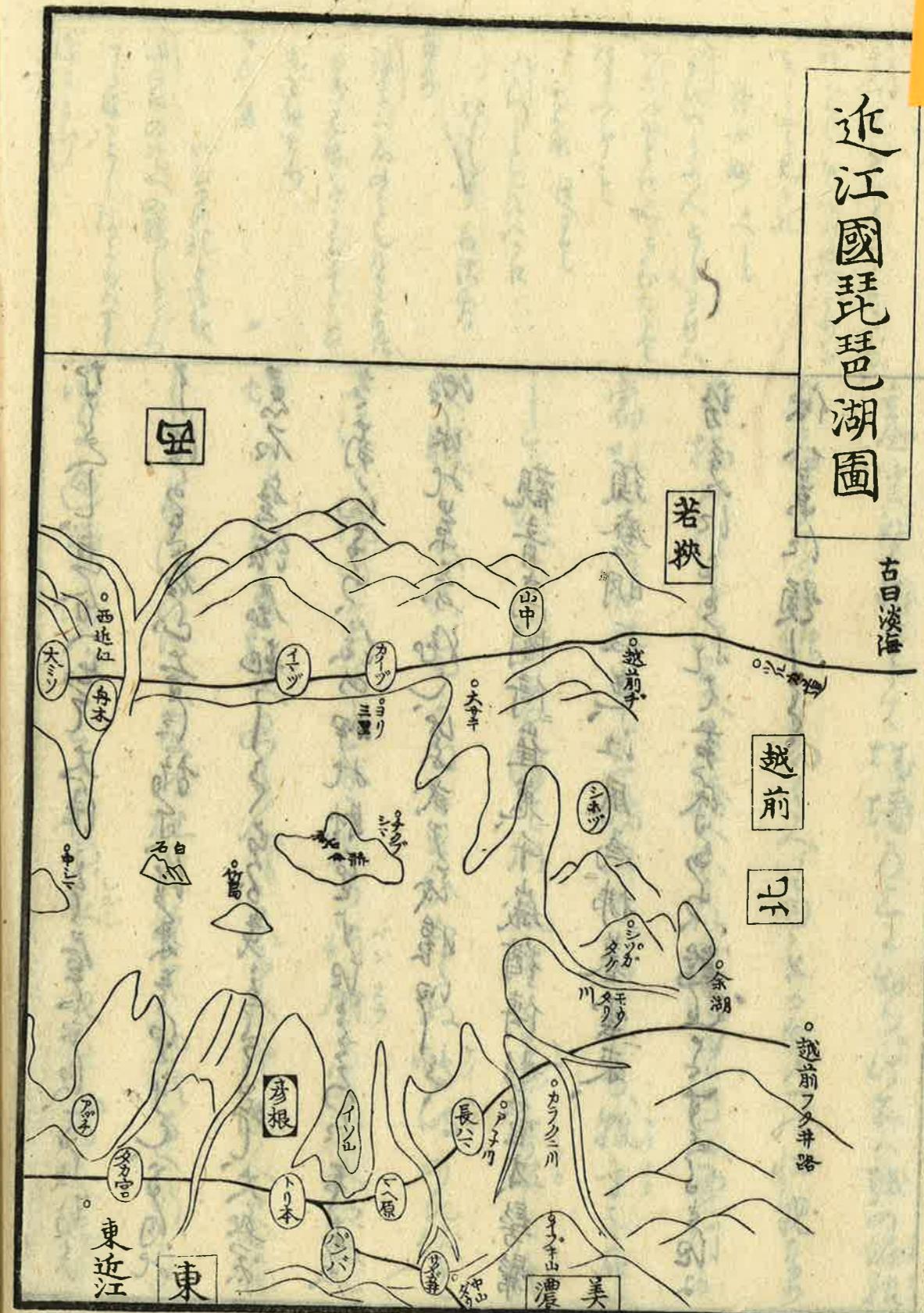
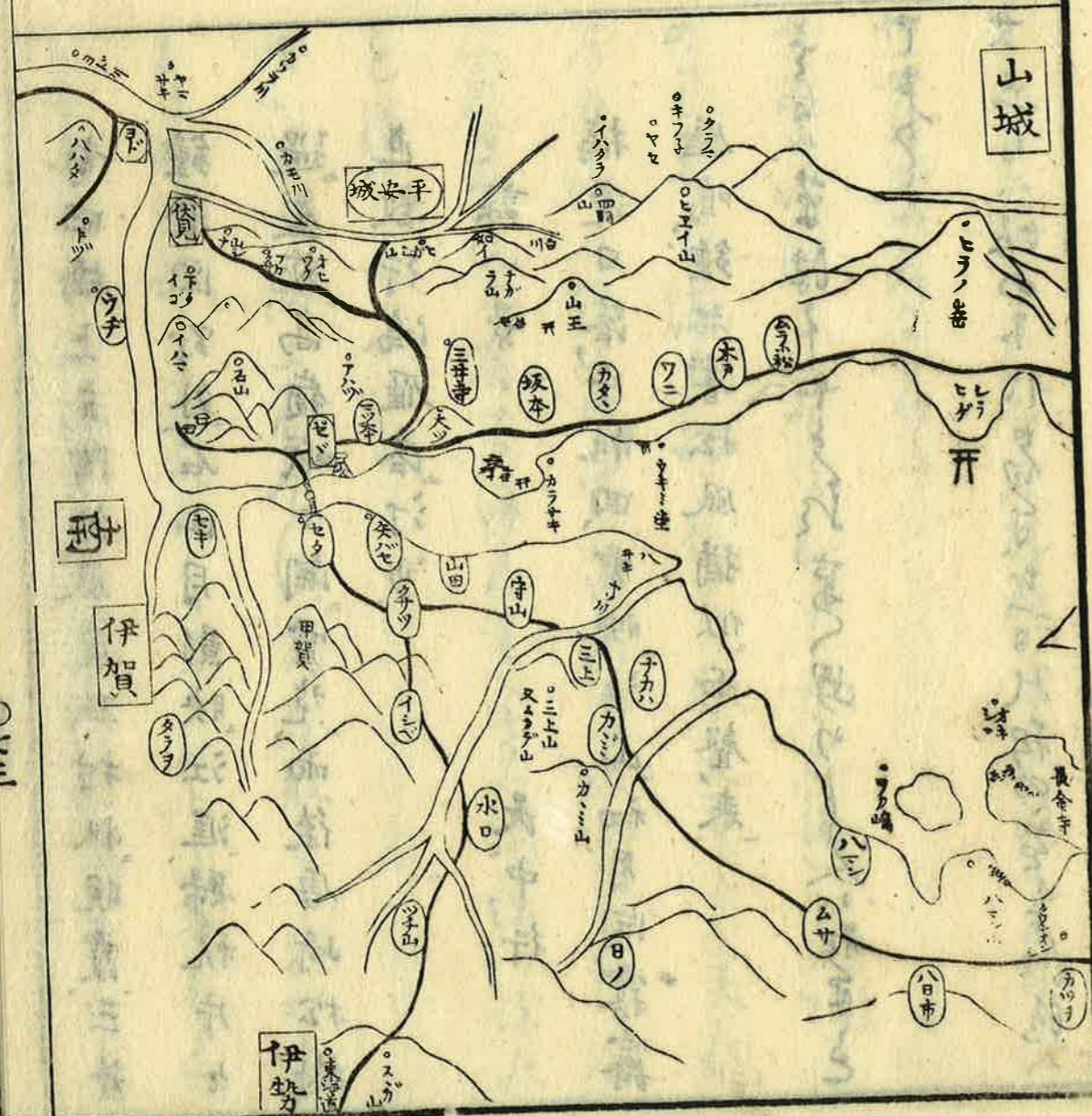
三

1

卷之三

近江國琵琶湖園

長山不移日記



勢田橋上夕陽斜、風度孤村收晚霞、三井
鐘聲聞野外、石山月影映江涯、歸帆片々
過蘆荻、高嶺峩々開雪苑、雨後唐崎松樹
色、數行鴻雁落汀沙、

詠八景

長中行

槁邊日落、亭航四、雪映、江山、初月、開、霧霽
雁鳴、鐘、響、松風猶似雨聲來、

まじめ葉は、いやとれ、あく細り、人へ、音はと
てます。

女三郎、ハ、坂の下に、お、ゆす、ち、り、お、の、を、く、い、ぬ、ハ

ヨリ、テ、津、多、シ、多、久、絶、移、り、う、行、路、多、方、近
サ、西、日、出、あ、よ、や、な、ま、し、く、く、と、北、海、仙、人、相、子
女、又、日、出、あ、よ、や、な、ま、し、く、く、と、北、海、仙、人、相、子
の、と、東、み、里、後、日、出、よ、化、升、天、と、く、天、龍
乃、宮、仙、人、保、ふ、流、离、離、あ、ま、さ、の、日、と、く、館
に、着、あ、れ、て、有、名、津、乃、里、一、き、だ、わ、ほ、れ、
毛、猿、上、人、

女、六、日、津、油、よ、名、津、源、良、香、散、を、う、れ、か、と、
毛、猿、上、人、

毛、猿、上、人、

茶などと通じて皆手を貸して置く
女七日演葉子やらる

廿八日新坂

宗長は吟詠五時四人初仕
今川義忠字孫秀樹は既後
生友志一体保冷氷込え年
前居子を東海自早はるか
初山住處乃と尋ね
早見

女九日丸子右内門の西に望月庵を直と駅舎
石表あり、連寺源空宗長乃高徳、たら、いじゆき
日と高し、便り宿をさへんとまどはす門
木の下宿山土の宿をとよはるを是
トモ新山、紫葉屋寺ノヤマカヒツ此度
ひうれかくふきの設もなし。室長の事もあれば
て

そとめ、せ里地ともひく良木を惜みのゆなれ、宗
長の墓とたぬれを左の隅止塚ありて幸また
石碑をも見ずに墨くのと、厨下より茶をとる
住持のものかうかう家長代親^{グンクヒヨキリ}母節切苦^{ハラハラ}、
釜などくわいてても良きよむるまれが不^ハ
て少^ハく

唯日暮には久松ひ一さんと二人連れ、
町乃中といたまやこれと八場家の事とを
こ二里はかういれとあはる防食八院を徹^{スイビ}
おはらなる、津席萬八郎原鉢やすゑあら、

前乃父夫子事内をもとめに清風の間より
 徒舟をうちて西門よりのる海流にてそぞ
 まくまくとひらり、われの坂、石燈、石櫻をす
 かく石標の旗あ、鉢馬籠等と車り、なまく島
 海あり、ハ町をりと大の内は萬能が、鐵把、
 長脚鎌、狼牙棒、などと、三五の幕奉と後毛丸
 を引ね、士卒といふ人衆続々とまよ連びて、先と
 併合せば、セイセウ嘉折コニラカメにてとく、之又丁のあれ八坊
 全て、華表、橋門、又至塔うのむ、諸寺とて、
 もあり、佛在祠よりれど、經傳、事歴て出よ

佛廟の北緯とひきだして、南は
 やまと處とひきだ、東は乃木より洋手と
 金色の節正旗、拂事、奉事、と曰ひて、祭事等
 たり、側よせた地主と清風庵、また入、佛在祠
 と子石をめどらふ、
 あくち清風庵、ひきだに、金の旗とて、
 生と金めだと保乃入、と清見寺、又ア拂事等
 と室主を承る事ある

自三保望富士山

清見寺山、號巨鼈故
 三四及此

白玉擣天蓬、青岳傍海開、巨鼈背上色可

信是蓬萊

おのまことに人を已に整えし蓬萊よりは
升りきにあゆとて水極くと、漆樹の御
室へ様子にあす、御事とてあら人のうへ、太
鬼よれ代めにたゞとも、その先事よき
十二月朔日と候、アリナリ國事、上る程ケ各、下る
小石の邸よつゝ、あよひ妻母所に高弟、源流人
ともとも歎絶色、あがけらばは、直府不思
わて縁どり、中代の監督、アリヒキ安東の少
彦乎とて、かの正令、雅樂來るふ。もととく風流

曆二冊とある、とへて、そふひのくにほり
十二月朔日とて、高弟天寶、
家へよき。

萬里行程西海隈、風霜無恙故園回、江山
踏盡為何事、不是張騫慱望才。

明和四年丁亥冬十一月

常州水戸長玄珠記

金童齋談圖

古文日本興味全圖

二奇行是日記

赤水先生著述出版書名

改正日本輿地路程全圖

唐士歷代沿革圖

全重鐫縮圖

小本宮入

地球萬國圖說

和蘭新譯地球全圖

五常圖說

禮記王制地理圖說

大清廣輿圖

清桂唱和集

是紀行中清客贈塔詩文

東與紀行

漢文

標註
圖画

附 奥羽名山北越七奇
諸州言碑政

文金堂製本目錄

大懸齋藏通鑑

河内屋太助

小學

大本二冊

世間少數本から缺が多いため
今後必ずして意焼のものもしくは
唐音和解

二冊

唐音に關する書物は著者未詳
通用の言葉と之を以て之を解く

唐音和解

二冊

唐音に關する書物は著者未詳
通用の言葉と之を以て之を解く

白石先生鬼神論

二冊

小論に明白に得失と權
選史に載る諸説と解

爲學初問

周南先生著

此書は學問の道理
儒佛神の論より

天學指要

西村遠里著

序文の奥義と解く児童と之を曉やすくも
初學の惑と解く児童と之を曉やすくも

孝經經典餘師

一冊 小兒とも曉やすくも
四冊 易きすれ書くも

小兒とも曉やすくも
本文の序文の意と之を晓やすくも
本文の序文の意と之を晓やすくも
本文の序文の意と之を晓やすくも

子華子 全二冊 書經講義

書經の注

畫圖西遊譚

東都司馬江漢先生著自画

五冊

改正難波丸

六冊

大坂市中町名尽識變所付
の名而其外のものと圖を記

大坂名所獨案內

一本

道中もうのく解説

新撰伊勢細見記

一冊

道中もうのく解説

兩面年代記

一冊

年号の事跡と之を記

大成年代廣記

折本

年号の事跡と之を記

天象管窺抄

唐詩平仄考

五常圖說

禮記王制地理圖說

燕石雜志

六冊

漢の俗風

孝經太義國字解 三冊

洪範全書 六冊

文化五經 道春堂 新刻 李十二冊

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

古今詠物詩選 朱竹使先生輯全四冊

附錄唐宋名家詩話 漢洋山人著 一冊 合本五冊

漢魏六朝隨唐五代宋元明人詩一千首

家承物の詩と佩文集の内より選輯 一冊 袖珍本

月水奇縁 馬琴著

五冊

新羅解脫物語

同著

北高画

五冊

他

五冊

昔語質屋庫 同著

五冊

俗說と弁

本

本

金花夕映 谷藏著

五冊

唐金藻

門

日

藏

上

人

本

石言遺響 馬琴作

五冊

北高画

五冊

小夜中山

夜

山

曲

山

曲

山

曲

月宵鄙物語 小栗外傳

六冊

北齊画

小栗判官

天

娥

月

夜

山

曲

滑稽即興新

五冊

東京傳聞

新

興

新

新

築山庭造傳

三冊

同庭作傳

冊

農家益

三冊

方

地

見

す

方

地

見

す

方

地

見

す

方

地

見

す

開書私傳抄

一冊

方

流

物

仕

方

物

仕

方

物

仕

方

物

仕

方

物

仕

方

物

仕

方

物

仕

方

物

仕

方

同後篇

二冊

此卷は是とて植と植

國籍の查定

地

同後篇

二冊

此卷は是とて植と植

國籍の查定

地

都名所圖會 六冊 同拾遺 五冊

大和名所圖會 七冊 河內名所圖會 六冊

和泉名所圖會 四冊 摄津名所圖會 十二冊

以上 平安秋里大著 五畿内名所圖會 箱入全部三十冊

東海道名所圖會 六冊 木曾馨名所圖會 七冊

伊勢泰宮名所圖會 六冊 播磨名所圖會 五冊 七冊

紀伊國名所圖會 五冊 同二篇 五冊

住吉名勝圖會 五冊 古輩順拜圖會 十冊

唐土名勝圖會 六冊 大清都の有る名山城等全内 大清都の有る名山城等全内

都花月名所 懷中本 唐土と目前見るかに記入

同艸比種 似貞画入 一冊

役者百人化粧鏡 似貞画入 一冊

歌舞妓叢書 三冊 金門五三櫻の薦入

俳優奇跡考 古今役者考の一代記 八冊

芝居両面鏡 古今役者考の一代記 八冊

歌舞訓蒙圖彙 歌の芝居の二面鏡を解説する 五冊

歌舞妓叢書 十二冊 舞臺俳優の登場人物

歌舞訓蒙圖彙 歌舞の芝居の二面鏡を解説する 五冊

文化歲在乙丑孟春

東武 本石町四十目

京都 二條富小路

林 伊兵衛

藤井 孫兵衛

木林 木林

田 邑 九兵衛

淺野 紹兵衛

制衣本書肆

攝城

心齋橋唐物町

高麗橋一丁目

安坐寺町

田 邑 九兵衛

藤井 孫兵衛

木林 木林